

博士論文（要約）

論文題目 満洲・シベ語現代方言音韻論

氏名 王 海波

## 目次

謝辞	i
目次	ii
図表目次	vi
略号と記号	ix
漢字の字体について	x
第1章：序論	1
1.1. 本研究の目的	1
1.2. 満洲・シベ語の概要と変種	1
1.2.1. 満洲・シベ語の概要	1
1.2.2. 満洲・シベ語の変種	1
1.2.2.1. 古典語	1
1.2.2.2. 三家子方言	1
1.2.2.3. 黒河方言	5
1.2.2.4. シベ方言	7
1.2.2.5. 泰来方言	12
1.2.2.6. 北京方言	13
1.2.2.7. ラリン方言	16
1.2.2.8. 盛京南方言	17
1.2.2.9. 寧古塔方言	18
1.2.2.10. アルチュカ方言	20
1.2.2.11. バラ方言	20
1.2.2.12. 吉林省の方言	21
1.2.2.13. 『ニシャン・サマン伝』の地域の方言	21
1.2.2.14. その他の変種	21
1.2.3. 各時代の方言の分布のまとめ	21
1.2.4. 方言間の語彙の相違の例	25
1.3. 研究方法とデータ	27
1.4. 本章のまとめ	28
第2章：形態論の概要	29
2.1. 形態素の種類	29
2.2. 接語	29
2.2.1. 格接語	29
2.2.2. 名詞句化接語	31
2.2.3. 旧情報接語	33
2.2.4. 限定接語	34
2.2.5. モダリティ接語	35
2.3. 屈折	35
2.3.1. アスペクト接辞	35
2.3.2. モダリティ接辞	36
2.3.3. 条件接辞	38

2.3.4. 程度接辞	38
2.4. 語形成 1：派生	39
2.4.1. 動詞化接辞	39
2.4.2. 使役接辞	39
2.5. 語形成 2：複合	43
2.6. 語形成 3：重複	43
2.7. 言語接触による借用・語形成・意味範囲の変化	43
2.7.1. 借用	43
2.7.2. 翻訳借用	44
2.7.3. 言語接触による意味範囲の拡張	44
2.7.4. 言語接触による意味範囲の縮小	45
2.8. 本章のまとめ	45
<b>第 3 章：現代方言の音韻論 1</b>	<b>46</b>
3.1. 音素と異音	46
3.1.1. 音素と異音の一覧	46
3.1.1.1. 三家子方言の音素と異音	46
3.1.1.2. 黒河方言の音素と異音	52
3.1.1.3. シベ方言の音素と異音	56
3.1.2. 方言間における異音の分布の違い	65
3.1.3. 音素設定上の若干の問題点	67
3.1.3.1. いわゆる二重母音について	67
3.1.3.2. ye か yi かについて	71
3.1.3.3. 語頭の [jy] と [ʔy]	72
3.1.3.4. 音声的に現れない高母音の音韻表記について	73
3.1.4. 借用語の音韻特性	74
3.2. 音素配列論	75
3.2.1. 語における一般的な音素配列の制約	75
3.2.2. 音節構造	77
3.2.3. 音節構造の制約	81
3.2.4. 音節境界を跨ぐ場合の子音連続の制約	83
3.3. 本章のまとめ	88
<b>第 4 章：現代方言の音韻論 2</b>	<b>89</b>
4.1. 強勢	89
4.1.1. 強勢音節のピッチ	89
4.1.2. 高いピッチの強勢	90
4.1.3. 低いピッチの強勢	94
4.1.4. 複合語における強勢の数について	96
4.1.5. 音韻的語	96
4.2. 母音調和	97
4.2.1. 母音調和の概念	97
4.2.2. 共起	97
4.2.3. 同化	99

4.2.4. 母音と子音の間の調和	102
4.3. 本章のまとめ	105
<b>第5章：古典語と現代方言の比較 1</b>	106
5.1. 古典語の変種について	106
5.2. 古典語の表記について	107
5.3. 発音の比較	110
5.3.1. 子音の調音法の比較	110
5.3.1.1. b と w/b の対応について	110
5.3.1.2. 摩擦音の有声性の比較	113
5.3.1.3. 流音の対応	118
5.3.2. 子音の調音点の比較	121
5.3.2.1. 軟口蓋音と口蓋垂音の比較	121
5.3.2.2. 口蓋化と逆口蓋化	127
5.3.2.3. ŋ と i/y の調音点の同化	131
5.3.3. 子音の挿入・脱落	133
5.3.3.1. 語頭における y の挿入	133
5.3.3.2. 語末における鼻音の挿入	135
5.3.3.3. n と口蓋垂音の間における t の挿入	137
5.3.3.4. 鼻音の後における同調音点の破裂音の消失(1)	137
5.3.3.5. 鼻音の後における同調音点の破裂音の消失(2)	138
5.3.4. 母音の円唇性に関する比較	142
5.3.4.1. 母音の円唇性の同化	143
5.3.4.2. 円唇母音の同化による後続子音の円唇化	145
5.3.5. 母音の前後に関する比較	146
5.3.6. si と še	149
5.3.7. 母音の脱落	152
5.3.8. 重音脱落	155
5.3.9. 音位転換	157
5.3.10. その他の比較	159
5.3.10.1. 同化・異化による鼻音の調音点の比較	159
5.3.10.2. 唇音と後舌子音の間の比較	161
5.3.10.3. 子音 l と n	163
5.3.10.4. 語頭の n と m	167
5.3.10.5. 語頭の n の有無	168
5.3.10.6. 母音と破裂音の間における鼻音の挿入	171
5.3.10.7. l の挿入	171
5.3.10.8. 子音の融合	172
5.3.10.9. a の逆行同化による i > ya	173
5.3.10.10. 円唇子音の同化による後続母音の円唇化	174
5.4. 発音の違いに関与する要素	175
5.4.1. 形態論的要素	175
5.4.2. 意味論的要素	176
5.4.3. 言語接触	176

5.5. 音素配列の制約の比較	177
5.5.1. 語における一般的な音素配列の制約の比較	177
5.5.2. 音節構造の制約の比較	177
5.5.3. 音節境界を跨ぐ場合の子音連続の制約の比較	181
5.6. 本章のまとめ	184
<b>第6章：古典語と現代方言の比較 2</b>	185
6.1. 強勢の変化	185
6.1.1. 低いピッチの強勢の形成と結果	185
6.1.1.1. 低いピッチの強勢が生じた理由	185
6.1.1.2. 変化の後は1音節語か？	190
6.1.2. 強勢の位置の変化	192
6.2. 母音調和の変化	192
6.2.1. グルーピングの性質	192
6.2.1.1. 古典語のグルーピング	193
6.2.1.2. pre-古典語のグルーピング	197
6.2.1.3. 現代方言におけるグルーピングの崩れ	200
6.2.1.4. まとめ	202
6.2.2. 接辞の母音におけるグルーピングの有無の変化	203
6.3. 本章のまとめ	206
<b>第7章：むすび</b>	207
用語索引	210
参考文献	211

## 図表目次

図 1-1 : 各方言の変遷 (google の地図を白地図として使った) .....	24
図 6-1 : Contrastive hierarchy for Written Manchu (Ko Seongyeon 2012: 256 からの引用) .....	196
図 6-2 : 後方舌根性の母音調和のグルーピングの崩壊 .....	202
図 6-3 : 円唇性の metaphony のような現象の発展 .....	203
表 1-1 : 三家子方言の話者 (高荷紅・石君広 2013: 69 に基づく まとめ) .....	3
表 1-2 : 黒河方言の話者 .....	6
表 1-3 : シベ人の歴史の略年表 (Gorelova 2002: 31-35 に基づく まとめ) .....	8
表 1-4 : シベ人の移動 (Gorelova 2002: 31-35 に基づくまとめ) .....	9
表 1-5 : 新疆で 500 人以上のシベ人のいる市と県 (Kim Tongso 1996: 3 と中国錫伯族双語研究編委会 2004: 24-25 からの引用) .....	9
表 1-6 : 女真語の 11-19 とアルチュカ方言と北京方言弓術用語と 古典語における同源語 .....	16
表 1-7 : 各方言の変遷 .....	22
表 1-8 : informant 一覧 .....	27
表 2-1 : 三家子方言・黒河方言・シベ方言の格接語の形式 .....	30
表 2-2 : =niŋe ~ =ŋe の分布 .....	31
表 3-1 : 三家子方言の子音音素 .....	46
表 3-2 : 黒河方言の子音音素 .....	52
表 3-3 : シベ方言の子音音素 .....	56
表 3-4 : シベ方言の完了相連用接辞と進行相接辞の音韻と音声 の形式の比較 .....	60
表 3-5 : 中国語の n で終わる漢字からの借用語 (漢字 1 つだけの語の場合) .....	62
表 3-6 : 中国語の n で終わる漢字からの借用語 (漢字+se (子) の場合) .....	62
表 3-7 : 音素 s の異音の分布の違い .....	65
表 3-8 : シベ方言の軟口蓋音と口蓋垂音による対立の例 .....	67
表 3-9 : 語幹内における音節末尾子音の口蓋化を表す音韻表記 .....	74
表 3-10 : 阻害音音素・共鳴音音素・母音音素の出現頻度 .....	76
表 3-11 : 三家子方言の音節構造の例 .....	78
表 3-12 : 黒河方言の音節構造の例 .....	79
表 3-13 : シベ方言の音節構造の例 .....	79
表 3-14 : シベ方言における口蓋垂音+母音の実例 .....	81
表 3-15 : 各音節数語の音節の種類の出現頻度 .....	83
表 3-16 : 三家子方言における音節境界を跨ぐ子音連続の可能性 .....	84
表 3-17 : 黒河方言における音節境界を跨ぐ子音連続の可能性 .....	85
表 3-18 : シベ方言における音節境界を跨ぐ子音連続の可能性 .....	86
表 4-1 : 三家子方言における母音の共起の可能性 .....	98

表 4-2 : 黒河方言における母音の共起の可能性	98
表 4-3 : シベ方言における母音の共起の可能性	98
表 4-4 : 黒河方言の語幹の母音と完了接辞の母音の関係	102
表 4-5 : シベ方言の語幹末の母音の円唇性と完了接辞の 母音の円唇性の関係	102
表 4-6 : 語根内における「口蓋垂音+低母音」と「軟口蓋音+低母音」 の出現頻度	104
表 5-1 : 三家子方言の /ʃ/ と /ʒ/ の分布	109
表 5-2 : 古典語の /g/ と /g'/ の分布	109
表 5-3 : b と w/b の対応に関わる要素と方言の差異	113
表 5-4 : 母音間の f の有声性のまとめ	115
表 5-5 : 母音間における各調音点の摩擦音の有声化のまとめ	117
表 5-6 : 異なる年代における r > l のまとめ	121
表 5-7 : シベ方言の軟口蓋音と口蓋垂音に関する制約	124
表 5-8 : Vŋi, VŋyV における ŋ と i, yV の調音点の同化の方言差の例	133
表 5-9 : i で始まる古典語とシベ方言における同源語の例	134
表 5-10 : シベ方言の nt > n の例	138
表 5-11 : ŋg, ŋc における g, c の脱落 (アルチュカ方言とバラ方言の 場合)	142
表 5-12 : a + 円唇母音の場合の円唇性の同化	143
表 5-13 : e + 円唇母音の場合の円唇性の同化	144
表 5-14 : 逆行前舌母音同化 : a の場合	147
表 5-15 : 逆行前舌母音同化 : e の場合	148
表 5-16 : 逆行前舌母音同化 : o の場合	148
表 5-17 : 逆行前舌母音同化 : u の場合	148
表 5-18 : 逆行前舌母音同化発生の可能性	149
表 5-19 : si > še	151
表 5-20 : Verbiest (1696: 6) が挙げた母音の脱落の例	152
表 5-21 : シベ方言の baxɛ- に -xɛ がつく場合に重音脱落が起こるか に関する記録	155
表 5-22 : シベ方言の baxɛ- に -xɛ=yi がつく場合に重音脱落が起こる かに関する記録	155
表 5-23 : 先行研究における gisure-re のシベ方言の同源語で重音脱落 が起こる場合と起こらない場合の例	163
表 5-24 : w と x の対応	163
表 5-25 : 古典語の n と方言の同源語の l が対応する例	164
表 5-26 : 古典語の l と方言の同源語の n が対応する例	164
表 5-27 : 古典語の語頭が n の語のシベ方言の同源語が m で始まる例	167
表 5-28 : 語頭における n の有無	169
表 5-29 : シベ方言における a の逆行同化による i > ya の変化の 個人差の例	173
表 5-30 : シベ方言における a の逆行同化による i > ya の変化が 起こらない例	174
表 5-31 : 音節末尾の半母音 + 鼻音の可能性	180

表 5-32 : 『五体清文鑑』にある古典語の語における音節境界を跨ぐ 子音の可能性……………	182
表 5-33 : 音節境界を跨ぐ「阻害音+共鳴音」の可能性の変化と、語末 子音と音節末子音の種類の変化のまとめ……………	183
表 5-34 : シベ方言における「n+後舌子音」の由来……………	184
表 6-1 : 2 音節名詞に対格接語・与格接語がつく場合の例 (三家子方言) ……………	185
表 6-2 : 1 音節目の母音が a である 2 音節名詞に対格接語・与格接語が つく場合の例 (三家子方言) ……………	186
表 6-3 : 2 音節動詞語幹に未完了接辞・完了接辞がつく場合の例 (三家子方言) ……………	186
表 6-4 : 1 音節目の母音が a である 2 音節動詞語幹に未完了接辞・完了 接辞がつく場合の例 (三家子方言) ……………	187
表 6-5 : 2 音節目の頭子音が唇子音の 2 音節動詞語幹に未完了接辞・ 完了接辞がつく場合の例 (三家子方言) ……………	188
表 6-6 : 2 音節目の頭子音が唇子音の 2 音節動詞語幹に未完了接辞・ 完了接辞がつく場合の例 (シベ方言) ……………	188
表 6-7 : 2 音節目の頭子音が唇子音以外の子音の 2 音節動詞語幹に 未完了接辞・完了接辞がつく場合の例 (シベ方言) ……………	189
表 6-8 : 古典語の語における母音の共起の可能性 (Zhang Xi 1996: 44 からの引用) ……………	193
表 6-9 : o で終わる単音節動詞語幹の完了接辞……………	194
表 6-10 : 古典語の母音の対立の序列 (Ko Seongyeon 2012: 256 に 基づく再整理) ……………	196
表 6-11 : The Vowel System of Chin Jurchen (Kiyose 1998: 124; 2000: 180) ……………	198
表 6-12 : pre-古典語の母音体系の再建……………	200
表 6-13 : 接辞の母音におけるグルーピングの有無の変化……………	205



## 略号と記号

### (i) 方言名の略号

Sa	三家子方言
K	黒河方言
Si	シベ方言
Si-C	察布査爾のシベ方言
Si-I	伊車嘎善のシベ方言
CM	古典語 (Classical Manchu)
J	女真語

### (ii) 発音の略号

C	子音
V	母音
V <sub>高</sub>	高母音
G	渡り音

### (iii) アポストロフィ (')

本論におけるアポストロフィの使用は、久保ほか (2011a: 10) に従う。すなわち、強勢の有無が弁別的である場合、強勢がある音節の母音の直後にアポストロフィをつけて表記する。

### (iv) イントネーションの記号

久保ほか (2011a: 12) は、シベ方言には無標のイントネーション (下降調) と有標のイントネーション (上昇調と中平調) があると指摘しており、有標の上昇調と中平調はそれぞれ「↑」と「→」を用いて表している。本論におけるイントネーションの記号の使用は、久保ほか (2011a: 12) に従う。

### (v) ピッチの記号

ピッチを表すには次のような表記がある。

- a. 記号「ˆ, ˘」を用いて、それぞれ高いピッチ開始、高いピッチ閉じ、低いピッチ開始、低いピッチ閉じ、を表す。山本 (1969)、早田輝洋 (1985a)、久保 (1989) には、この記号の使用が見られる。
- b. 音節末に記号「1111」をつけて、該当音節のピッチを高から低まで5段階を分けて表す。李栄 (編) (1993-2003) 『現代漢語方言大詞典』はこの記号を用いている。久保ほか (2011a: 12-13) にも、この記号の使用が見られる。  
本論では、上記の b. を用いる。

## 漢字の字体について

中国語の簡体字と日本語の新字体は形式が異なる場合がある。例えば、中国語の簡体字の「満」と日本語の新字体の「満」は形式が異なる。この場合の中国語の簡体字は、明朝やゴシックのフォントでは表示できない場合がある。したがって、フォントを統一するため、中国語で書かれた文献を引用する際、中国語の簡体字を日本語の新字体に変える（例えば、「満」を「満」に変える）。なお、中国語の繁体字と日本語の新字体の形式が異なる場合と、日本語の旧字体と新字体の形式が異なる場合も、日本語の新字体に変える。

## 第1章：序論

### 1.1. 本研究の目的

本研究の目的は満洲・シベ語の現代方言（三家子方言・黒河方言・シベ方言）の音韻論を記述することにある。

これまでの満洲・シベ語の先行研究には、次のような偏りがある。古典語の研究と比べて、現代方言の研究は少ない。現代方言の研究のうち、シベ方言以外の方言の研究は少ない。シベ方言以外の現代方言の研究のうち、語彙集とテキストの記録は比較的多いが、音韻理論を用いての考察は少ない。方言を跨ぐ考察（方言間の共通点と相違点についての考察）も少ない。また、古典語と現代方言の比較の研究は現代方言の研究より少ない。なお、超分節的な現象の研究は、分節的な現象の研究より少ない。

そこで本研究では、現代方言に重きをおいて、音韻理論を用いて、シベ方言だけではなく、他の方言も考察する。各方言をそれぞれ別に考察するだけではなく、方言の間の共通点と相違点についても考察する。また、現代方言の音韻論だけを考察するのではなく、古典語と現代方言の違いについても考察する。なお、分節音韻論と超分節音韻論を共に考察する。

筆者が現地調査した方言は、三家子方言と黒河方言とシベ方言という3方言である。そのため、本研究で扱う現代方言は主にこの3つの方言である。

### 1.2. 満洲・シベ語の概要と変種

#### 1.2.1. 満洲・シベ語の概要

Ikegami (1974) によると、満洲・シベ語は満洲ツングース諸語に分類される。また、Ikegami (1974) は音韻対応を踏まえて満洲ツングース諸語を4つのグループに分類し、満洲・シベ語を女真語と同じ種類に分類している。

#### 1.2.2. 満洲・シベ語の変種

本節では記録にある満洲・シベ語の各変種の使用地域、歴史、現状、先行研究について紹介する。

##### 1.2.2.1. 古典語

古典語は清国（1616-1912）の公用語である（Gorelova 2002: 27）。「文語」と呼ばれることが多いが、文体として口語と対立する意味合いの文語と誤解される可能性があるため、本論では、早田輝洋（2010a）と早田清冷（2015）の「満洲古典語」の言い方に従い、「古典語」と呼ぶことにする。

早田輝洋（2012）は、古典語の満洲文字には無圏点満洲文字と有圏点満洲文字の違いがあると指摘している（5.1. と 5.2. を参照されたい）。

##### 1.2.2.2. 三家子方言

###### [1] 使用地域

三家子方言は現在中国黒龍江省齊齊哈爾（チチハル）市富裕県三家子屯で話される方言であり、三家子という名は元来、陶胡魯（tokulu）・孟吉勒（menjire）・

計不出 (gibcu) という 3 つの姓の家族が居住していたことに由来する (清格爾泰 2000: 2)。以下では、陶氏・孟氏・計氏と略称する。

三家子方言の使用地域と後述する泰来方言の使用地域のどちらも嫩江に近い (趙傑 1989: 4)。しかし、管見の限り、嫩江流域における三家子方言・泰来方言以外の方言に関する報告はない。加藤直人は 1994 年に嫩江流域の下流に近い土爾伯特を調査したが、満洲・シベ語に関する情報が得られなかったという (加藤 1994)。

## [2] 歴史

三家子方言の話者の歴史に関して、金啓琮 (1981: 23-24) は次のようなことを記述している。1689 年に清国とロシアの間でネルチンスク条約 (尼布楚条約) が結ばれた。両国の境界線が定められた後、薩布素将軍は北側の国防のために、寧古塔の満洲人を、瓊瑋 (当時「黒龍江城」という) と墨爾根と齊齊哈爾 (当時「卜奎」という) という 3 箇所に移住させた。齊齊哈爾に移住した満洲人のうち、陶氏・孟氏・計氏は、後に齊齊哈爾を離れ、現在「大泡子」と呼ばれるところに移住した。その後、大泡子が積水したため、陶氏・孟氏・計氏は、現在の三家子屯に移住した。陶氏・孟氏・計氏が三家子屯に移住した後に、他の家族の満洲人も三家子屯に移住したものがいる。

## [3] 現状

Kim et al. (2008: 3) によると、現在三家子方言の母語話者は 10 人位である。一方、高荷紅・石君広 (2013: 69) によると、2010 年富裕県が認定した「満洲語伝承人」には 16 人いる。高荷紅・石君広 (2013: 69) が挙げた情報に基づいて、三家子方言の話者を次の表のようにまとめた。

表 1-1：三家子方言の話者（高荷紅・石君広 2013: 69 に基づくまとめ）

	1960年代	2010年代
孟家	孟昭祥	○孟淑静 女。孟昭祥の娘。1926年11月13日三家子生。
		○孟憲孝 男。孟昭祥の息子。1932年8月12日三家子生。
		○孟憲連 男。孟昭祥の兄の息子。1932年8月23日三家子生。
		○孟憲義 男。孟憲孝の遠縁のいところ。1928年7月20日三家子生。
	孟蓮瑞	
計家	計常義	○計金禄 男。計常義の孫。1946年03月13日三家子生。
	計春生	△計成甲 男。計春生の息子。
	計海生	○計福慶 男。計海生の弟の息子。1951年10月11日三家子生。
		○計万才 <sup>1</sup> 男。計海生の孫。1943年10月03日三家子生。
	計徳煥	－計艶栄 男。計徳煥の息子。
	計臥生	
	計常明	
陶家	陶来永	－陶双祥 男。陶来永の孫。
	陶金壽	○陶純栄 男。1935年6月20日三家子生。
	陶成富	○陶雲慶 男。1929年1月18日三家子生。
	陶振民	○陶青蘭 女。1946年10月22日三家子生。
	陶成頭	○陶玉華 女。1938年5月7日三家子生。
	陶芝蘭	△陶淑琴 女。1948年3月17日三家子生。
	趙家	趙喜慶
○趙金岭 <sup>2</sup> 男。趙喜慶の息子。1943年10月26日三家子生。		
△趙金純 男。趙喜慶の息子。		
○趙鳳蘭 女。趙喜慶のいところ。1926年8月23日三家子生。		
△陶淑琴 女。趙鳳蘭の娘。1948年3月17日三家子生。		
呉家		○呉賀雲 女。1929年10月25日岡屯村生。
		△呉鳳珍 女。1944年5月7日三家子生。
関家		○関鳳義 男。1938年8月6日三家子生。

注：2列目＝1960年代金啓孫が調査した話者。

3列目○付き＝2010年富裕県が認定した満洲語伝承人（16人）。

3列目△付き＝満洲語伝承人を除いた2010年代の話者。

3列目－付き＝2列目の後代だが話者でない人。

#### [4] 先行研究

##### (i) 内蒙古大学満語調査組による現地調査

1961年、清格爾泰・金啓孫・白音朝克図・恩和巴図は「内蒙古大学満語調査組」を組んで、三家子屯にてフィールド調査を行った（恩和巴図 1995: 1、清格爾泰 2000: 1）。

この調査で得られたデータに基づく研究には、金啓孫（1981）、清格爾泰（1982=1998）、恩和巴図（1992）、恩和巴図（1995）、恩和巴図（1997a）、恩和巴図（1997b）、Enhebatu（1998）がある。

<sup>1</sup> 高荷紅・石君広（2013: 69）の正文では「計万才」としているが、脚注では「計有才」としている。

<sup>2</sup> 高荷紅・石君広（2013）の69頁では「趙金岭」としているが、72頁では「趙金玲」としている。

金启琮 (1981) は、三家子屯の社会や歴史に重きを置いた記述である。言語学的記述は、基礎語彙集 (約 400 語) のみである。この基礎語彙集は国際音声記号ではなく、漢字と拼音 (ピンイン) で音を表すものである。

清格爾泰 (1982=1998) は、主に三家子方言の音韻論に関する記述である。具体的には、音素と異音、古典語と三家子方言の音素の対応関係、音節、強勢、長音、母音調和に関する研究とテキスト (ダイアログ) と語彙集 (約 1500 語) である。なお、Ko Dongho (1999) は清格爾泰の調査資料に基づく三家子方言の i による逆行同化に関する考察である。

恩和巴図 (1995) は、三家子方言の語彙と音韻に関する研究とテキスト (ダイアログおよびモノログ) と語彙集 (約 3800 語) である。

(ii) 1985 年、李樹蘭と仲謙は現地調査した。

李樹蘭と仲謙は 1985 年の初夏、三家子方言を調査した。李樹蘭・仲謙 (1992; 1993) は、三家子方言とシベ方言の形態論の基礎および一部の基礎語彙の対照的研究である。

(iii) 1986 年、黒龍江省満語研究所の劉景憲と黄錫恵と、中央民族学院の季永海は現地調査した。

季永海ほか (1989) は、三家子方言の会話のテキストである。季永海・白立元 (1990) は、中国語が三家子方言に与える影響に関する考察である。季永海 (2003) は、三家子方言の変化についての考察である。

(iv) 趙金純 (1986) は、現地の話者である趙金純が書いた三家子方言の時制に関する記述である。

(v) 1990 年 8 月、加藤直人・松村潤・細谷良夫は現地調査した。

加藤 (1991) はこの調査の報告である。

(vi) 1997 年、黒龍江省満語研究所の劉景憲と呉宝柱と蔣理は現地調査した。

劉景憲・呉宝柱・蔣理 (1997) はこの調査の報告である。

(vii) 2002 年 7 月、黒龍江大学満族語言文化研究中心の趙阿平と郭孟秀と唐戈は現地調査した。

趙阿平・郭孟秀・唐戈 (2002) はこの調査の報告である。

(viii) 2002 年、戴光宇は現地調査した。

戴光宇 (2003) は、三家子方言の個数を表す量詞についての研究である。戴光宇 (2012) は、三家子方言の音韻に関する研究である。

(ix) 2005 年、劉正愛は現地調査した。

劉正愛 (2009) はこの調査の報告である。

(x) 2005 年と 2006 年、Kim Juwon をはじめとする調査団は現地調査した。

Kim et al. (2008) は、三家子方言の音韻と文法の記述と、語彙集(約 1800 語)と会話文章と文法分析用の文章の記録である。高東昊(2009)はこの調査に関する口頭報告である。

(xi) 2008 年と 2009 年、筆者は現地調査した。

王海波(2009)は、三家子方言の音韻論と形態論を記述した。王海波(2011a)は、三家子方言の母音調和の性質を考察した。王海波(2011b)は、三家子方言の使役構文について考察した。王海波(2011c)と Wang Haibo(2013)は、三家子方言における強勢とピッチの変化について考察した。

(xii) 包聯群(2015)は、2010 年から 2015 年にかけての複数回の調査に基づいて、社会言語学的視点から三家子方言を考察している。

### 1.2.2.3. 黒河方言

#### [1] 使用地域

本論では、中国黒龍江省黒河市(黒河市に属する農村部などを含む)で話される満洲・シベ語の方言を黒河方言という。

#### [2] 歴史

三家子方言の節で述べたように、金启琮(1981:23-24)は、1689 年に將軍の薩布素は北側の国防のために寧古塔の満洲人を瓊瑋と墨爾根と齊齊哈爾という 3 箇所に移住させたということを記述している。現在の中国の黒河市は当時の瓊瑋の一部である。

すなわち、三家子方言と黒河方言の話者は 17 世紀の末頃に同じ時期に寧古塔から離れて北側の国防のために移住したのであり、その時までは共に寧古塔に住んでいたということが分かる。そのため、寧古塔に住んでいた三家子方言と黒河方言の先祖たちが、同じ方言を話していた可能性が高い。したがって、現在の三家子方言と黒河方言における違いは、17 世紀の末頃から 300 年余りの間にできた可能性が高いと考えられる。

#### [3] 現状

話者 K-1 によれば、話者 K-1 が幼い頃、満洲語だけができて中国語ができない年寄りが病気にかかったら、外部から漢人の医者と呼ぶとき、満洲語と中国語の通訳が必要だった。この通訳の役割をする人は、当時の子供たちだったという。すなわち、その頃の老人の中には、満洲語のモノリンガルがまだいたが、子供の中には、すでに満洲語と中国語のバイリンガルがいた、ということが分かる。

現在の黒河方言の話者の人数は分からないが、筆者が初めて黒河方言を調査した時点(2011 年)の現地の話者によると、20 人以下と推測される。

黒河方言には次のような話者がいる。

表 1-2：黒河方言の話者

(i) 王慶豊が調査した主な話者のまとめ (王慶豊 2005: 2)

	1964年	1982年	1986年	1989年
大五家子	呉宝順：男・53歳 藏義海：男・59歳 祁示和：男・59歳		富俊山：男・75歳 呉存有：男・69歳	
黒河市内		張蓮英： 女・75歳		
遼克県 宏偉村				孟秋英： 女・66歳

(ii) 郭孟秀が2003年に調査した人のまとめ (郭孟秀 2003)

大五家子	関振志 (男、73歳) と何世英 (女、73歳) : 夫婦。
下馬廠	何世傑 (71歳) と関根紅 (女、74歳) 。
西屯	邵文海 (85歳)、邵音才・呉世丑 (70歳以上) : 聞き取れるが話せない。
四季屯	何世環 (女、76歳)。夫の関文園も話者だが、調査時点の4年前に逝去した。
奇克鎮	邵金禄 (80歳) 。
新興郷	話者はいない。臧福君 (53歳) を調査したが、話者ではない。
宏偉村	徐淑賢 (女、76歳) 。

(iii) 筆者が調査した話者：1.3. を参照されたい。

#### [4] 先行研究

(i) Shirokogoroff は20世紀早期に黒河方言の話者を発見した (Shirokogoroff 1924)。しかし、Shirokogoroff による言語学的な資料は失われている (Norman 1974: 160)。

(ii) 河野六郎は1940年代に黒河市の大五家子と藍旗溝にて調査を行い、1944年に「満洲国黒河地方に於ける満洲語の一特色」という調査報告を發表している。この報告は1979年『河野六郎著作集 第1巻』に収録されている (河野 1944=1979)。内容は黒河方言の音韻論についての考察である。

(iii) 王慶豊は1960年代から90年代のはじまりまで黒河方言と三家子方言を調査した。黒河では、王慶豊は黒河市内、愛琿鎮、大小五家子 (紅色辺疆農場)、下馬廠、黄旗營子、四家子、大小烏斯力、達満族郷などにて4回にわたって調査した (王慶豊 2005)。王慶豊 (1984) は黒河方言の音韻論・形態論・統語論を略述している。王慶豊 (2005) は黒河方言の音韻論・形態論・統語論に関する研究と、語彙集とテキスト (文章、物語り、歌) の記録である。

(iv) 満都呼ほか (1985) は、黒河方言の大五家子郷大五家子村における使用状況の報告である。

(v) 1986年7月～8月、劉景憲・季永海・黄錫恵・白立元は調査組を組んで、黒河方言を調査した (郭孟秀 2003: 82)。



(vi) 烏拉熙春は1985年、1987年、1988年に黒龍江省にて現地調査した。烏拉熙春(1990)は、黒河方言・三家子方言・シベ方言の母音を比較する上で、同源語における母音の変化についての論文である。烏拉熙春(1992)は、黒河方言・三家子方言の音韻の研究である。烏拉熙春(1995)は、古典語黒河方言・三家子方言・シベ方言などのいわゆる「鬆緊元音」についての考察である。烏拉熙春(1997)は、女真語・古典語・黒河方言・三家子方言のデータに基づく渡り音の通時的変化についての考察である。

(vii) 郭孟秀は2003年8月上旬、黒河市の大五家子・下馬廠と、孫呉県の沿江満族達斡爾族自治郷の西屯(西霍爾莫金村)・四季屯と、遼克県の奇克鎮と、新興鄂倫春民族郷と、車陸郷宏偉村にて、黒河方言の使用状況について調査し、調査報告である郭孟秀(2003)を発表している。

(viii) 姜小莉(2009)は黒河方言の話者の何世環のモノローグ「音姜薩滿」を古典語の綴りで記録したテキストである。

(ix) 筆者は2011年と2012年、2回にわたって黒河市孫呉県沿江郷四季屯村、藍旗營、大五家子、下馬廠、潮水にて、黒河方言の基礎語彙と形態論について調査を行った。

#### 1.2.2.4. シベ方言

##### [1] 使用地域

シベ方言は、中国新疆ウイグル自治区伊犁哈薩克(イリ・ハザク)自治州の察布査爾(チャプチャル)シベ自治県(以下、察布査爾)、霍城県伊車嘎善シベ族自治郷(以下、伊車嘎善)、鞏留県(トックズタラ県)などで話される(中国錫伯族双語研究編委会2004: 24-25)。

シベ方言の和語名に関しては、先行研究によって次のようにいう場合がある。

- (i) 「シボ語」 早田輝洋(1985b)、楠木(1992)、中嶋(1998)
- (ii) 「シベ語」 久保ほか(2011a; 2011b)
- (iii) 「錫伯語」 早田輝洋(1996)
- (iv) 「満洲語口語」 山本(1969)
- (v) 「満洲語伊犁方言」 池上(1988; 1989; 1991)

##### [2] 歴史

###### (i) 歴史の略年表

シベ人の歴史に関しては、Gorelova(2002: 31-35)を参考した上で、次のような略年表の形式にまとめた。

表 1-3 : シベ人の歴史の略年表 (Gorelova 2002: 31-35 に基づくまとめ)

時間	出来事
～1438 年	シベ人は伯都納と齊齊哈爾に住んでいた。
1438 年	オイラト蒙古人に敗れたホルチン蒙古人は、シベ人の地域に入り、シベ人を征服した。
1619 年	シベ人は満洲人に臣服し、蒙古旗に編入された。
1700-1 年	[1] 伯都納のシベ人は盛京に移住した。 [2] 齊齊哈爾のシベ人は呼和浩特に移住した。それ以降は不明。
1764 年	盛京の一部のシベ人は、乾隆帝の命令で新疆伊犁に移住した。
1798 年と 1833 年	戦争や病気で伊犁川北岸の索倫營の兵員が大いに減ったため、伊犁の一部のシベ人は伊犁將軍の命令で 2 回にわたって北岸に移住した。
1874 年頃	索倫營の一部のダグル人やシベ人がロシアに亡命した。
1876 年	ロシアに亡命したダグル人やシベ人が塔城に移住した。

(ii) シベ人の昔の言語 : Jibsi 語 ?

張雷軍 (1994) と呉元豊 (1998) は、シベ人が満洲人に臣服して八旗に編入される前に「吉甫西語」(Jibsi) という別の言語を操っていたが、八旗に編入された後、Jibsi 語を忘れて、満洲語に移ったと述べている。

山本 (1969: 55) は、シベ方言における *jifəsi gisun* 「Jibsi 語」を次のように説明している。“= *mesə'i šivə'i daa gisun*” の部分の意味は、「我々シベ人の元の言語」という意味である。

***jifəsi gisun* [dʒɯfʃ gisun]** 土語 (= *mesə'i šivə'i daa gisun*) . native language, native tongue.

一方、蘇徳善 (1984) によると、蘇徳善は 1956 年に Jibsi 語をまだ記憶しているという第 5 牛録の高年層の老人を現地調査することで、Jibsi 語の語彙のほとんどがモンゴル語科爾沁 (ホルチン) 方言の語と同様であることを発見したと述べている。蘇徳善 (1984) はこの調査およびシベ人の歴史的資料を踏まえて、いわゆる Jibsi 語はむかしモンゴル語と言語接触したことによる語彙面の影響だけであり、昔のシベ語と今のシベ語は同じ言語であると主張している。

(iii) シベ人の移動のまとめ

前に挙げた表から、シベ人の最近数百年の移動が多いことが分かる。Gorelova (2002: 31-35) に基づいて、シベ人の移動をまとめると、次の表のようになる。

表 1-4：シベ人の移動 (Gorelova 2002: 31-35 に基づくまとめ)

～1700 年	伯都納のシベ人			齊齊哈爾 のシベ人
1700 年頃	盛京に移住			呼和浩特 に移住 <sup>3</sup>
1764 年	一部、伊犁に移住			その先 不明
1798 年・ 1833 年	一部、伊犁川北岸に移住	他、伊犁川 南岸に残る	他、盛京 に残る	
1876 年	一部、ロシア 亡命後、 塔城に移住			
現在	塔城の シベ人	霍城県の 伊車嘎善 のシベ人	察布查爾 のシベ人	

### [3] 現状

Zikmundová (2013) によれば、現在、遼寧省のシベ人は 20 世紀の初頭に満洲・シベ語の能力を失った。したがって、現在、満洲・シベ語の能力を持っているシベ人は、新疆ウイグル自治区のシベ人に限られるようである。

新疆ウイグル自治区で、シベ人の人口が 500 人以上の市と県を次に人数順にまとめた。この市は、県などを含まない市の中心部を指す。1982 年と 1992 年のデータは Kim Tongso (1996: 3) が挙げた佟克力 (1989) と賀忠徳 (1994) の統計による。2002 年のデータは、中国錫伯族双語研究編委会 (2004: 24-25) による。なお、2002 年のデータに「克拉瑪依 892 人」もある。

表 1-5：新疆で 500 人以上のシベ人のいる市と県 (Kim Tongso 1996: 3 と中国錫伯族双語研究編委会 2004: 24-25 からの引用)

	1982 年	1992 年	2002 年
察布查爾	17362 人	20120 人	20914 人
烏魯木齊市轄区 (県等含まず)	1316 人	2858 人	4076 人
伊寧市 (県等含まず)	1677 人	2693 人	3884 人
霍城県	2253 人	2741 人	3121 人
鞏留県	1283 人	1411 人	1488 人
塔城県	768 人	1529 人	1460 人
尼勒克県	608 人	626 人	628 人

上表から、察布查爾のシベ人は他の地域のシベ人より人数が圧倒的に多いということが分かる。また、李樹蘭 (1997: 69) によると、霍城県のシベ人は伊車嘎善に集中して居住している。筆者は察布查爾と伊車嘎善にて現地調査したため、本論におけるシベ方言は主にこの 2 箇所では話されるシベ方言を指す。

<sup>3</sup> 前述したように、三家子方言の話者の先祖が 1689 年に齊齊哈爾一帯に移住した。また、齊齊哈爾のシベ人が齊齊哈爾を離れる時間は 1700-1701 年である。したがって、三家子方言の話者の先祖と齊齊哈爾のシベ人が約 10 年間の間近い地域に居住していたことが分かる。

#### [4] 先行研究

(i) Radloff は 19 世紀末のシベ方言のテキストを記録した (Radloff 1893)。

佟中明 (2005) によると、Radloff は 1868-1869 年の冬、ロシアアルタイ地区で仕事するときに、シベ人にシベ語を教わりながら、「屍語故事」と「キルギズの物語」を記録している。一方、池上 (1988: 1) は Radloff (1893) にある記録に基づいて、「キルギズの物語」は Radloff が 1862 年と 1869 年に伊犁地方を踏査したときに記録したと述べている。

池上 (1988; 1989; 1991) は Radloff が記録した「キルギズの物語」および「康熙帝の逸話」をキリル文字からローマ字に翻字し、日本語のグロスをつけている。

(ii) F. V. Muromskii は 1906 年と 1907-1908 年と 2 回に伊犁にて調査した。佟中明 (1998: 88) と Clark (2006: 123) によると、Stanisław Kałużyński は Muromskii の調査記録を整理して、Kałużyński (1977) で発表している。

(iii) 山本謙吾と服部四郎は、満洲国の年代に恵遠城出身のシベ方言の話者である玉聞精一を調査した。山本 (1969) はシベ方言の基礎語彙集 (3061 語) である。服部・山本 (1955) はシベ方言の一人称複数代名詞におけるいわゆる「除外」と「包括」の性質に関する論文である。服部・山本 (1956) はシベ方言の音韻の体系と構造に関する論文である。また、早田輝洋 (1985a) と久保 (1988) はそれぞれの調査により、山本 (1969) のデータと異なる点について指摘している。

(iv) Norman は 1965-1967 年に台湾にて Fulbright fellow として滞在する間、シベ方言の話者である Kuang Lu (国立台湾大学教授) と Kuang Ting-yuan (Kuang Lu の息子) を調査した。Norman (1974) はシベ語の形態論の記述である。

(v) 李樹蘭ほか (1984) はシベ方言の音韻論・形態論・統語論の研究と語彙集 (約 6000 語) の記録である。李樹蘭・仲謙 (1986) はシベ語の音韻論・語彙・形態論・統語論に関する研究である。

(vi) 久保智之は、シベ方言に関する重要かつ豊かな研究を発表している。例えば、久保 (1993)、久保 (2000)、Kubo (2004)、Kubo (2008)、Kubo (2011) などはシベ方言の音韻論の研究である。Kubo (1997) はシベ方言における移動動詞 (「来る」と「行く」に相当する動詞) の方向性について扱う研究である。久保ほか (2011a) はシベ方言の教科書であり、久保ほか (2011b) はこの教科書に現れた単語を網羅した語彙集 (約 1200 語) である。

(vii) 児 (2018) は、余吐肯と郭瑪麗などの話者を調査し、シベ方言のアスペクト・モダリティ・証拠性 (evidentiality) に重きを置いた研究である。

(viii) 木村滋雄の研究には、シベ方言の音韻論に関する研究 (木村 2000; 2002) と形態論・統語論に関する研究 (木村 2001; 2003; 2004; 2005) がある

(ix) 筆者は、2015年に察布查爾のシベ方言と伊車嘎善のシベ方言を調査した。また、2016年と2017年に日本在住のシベ方言の話者を調査した。

王海波(2016)は、三家子方言・黒河方言・シベ方言における高母音の脱落の違いに関する考察である。

また、筆者は2015年以来、シベ方言をはじめとする満洲・シベ語の諸方言の同源語の辞書である王海波(未刊)『満洲・シベ語方言同源語辞典』の作成を試みている(現時点では未完成である)。

(x) その他の先行研究

烏拉熙春(1989)はシベ語の音韻体系およびシベ語と古典語の音声音韻の違いに関する論文である。

金炳喆・金寧(1992)とJin Ning(1993)は、シベ方言の会話のテキストである。

李兵はシベ方言を含む満洲・シベ語の複数の方言を調査する上で、李兵(1999; 2004)などの、方言を跨ぐ研究論文を発表している。

張泰鎬(2008)とZikmundová(2013)はそれぞれシベ方言の音韻論と形態論の考察である。

郝勛(2013)はシベ方言の方向を表す格標識の使い分けについての考察である。郝勛(2014)はシベ方言のテキストである。

[5] いわゆるシベ語と満洲語をなぜ同じ言語と見なすか

東北師範大学の満洲古典語の教員である金標(私信)は、中国では満洲族(満族)とシベ族(錫伯族)が異なる民族として認定されており、満洲族とシベ族が民族史的に同じ源か否か断定することが難しいため、いわゆるシベ語と満洲語は異なる言語と考えるべきであると見なしている。

一方、満洲語といわゆるシベ語は、かなり顕著な類似性を示しているため、満洲語といわゆるシベ語を同じ言語と考える意見もある。例えば、久保(2009: 89)は「満洲語とシベ語は、中国では別言語とされているが、言語学的には、方言関係としてよいと思われる」と述べている。

本論では、久保(2009: 89)と同じように、満洲語とシベ語を同じ言語の方言と見なす。

満洲語とシベ語が同源の方言関係か、それとも同源の別言語かについては言語学的方法のみで判断することが難しい。本論で満洲語とシベ語を同源の方言関係と見なすのは、次のような2点の理由による。

理由1: 相互理解可能度が高い。

シベ人の安俊(1985: 46)は、三家子の満洲人の老人達が話す口語とシベ族の現在の口語は、顔を合わせて口語で話をするのにまったく困難を感じないと述べている。

なお、筆者が三家子と黒河での調査録音を、シベ方言の話者Si-15に聞かせるときに、「大部分は理解し、時々変な発音をしているだけ」というコメントがあった。

## 理由 2：シベ方言の話者の自己認識

昌盛（1991: 69）は次のことを記述している。1764年シベ人が新疆に行ったとき、シベ人が自分の使用する言語を満洲語と思っていた。現在の「シベ語」のような言い方は1946年以後のことである。今でも年配のシベ人のうち、自分の言語を満洲語という人がいる。

筆者の現地調査では、シベ方言の母語話者のうち、自分の言語と満洲古典語が同じ言語であるという認識を持っている人は少なからずいる。古典語の知識のある者なら、なおさらである。例えば、察布查爾の「瑟公錫滿文化傳播中心」のシベ人は、シベ語と満洲語を同一言語と見なしている。

上記の理由により、本論では満洲語といわゆるシベ語を同じ言語の方言関係と見なす。但し、この言語の命名に関して、「満洲語」を総称に使うのに抵抗感を感じるシベ人がいる（例えば、話者 Si-1）。また、シベ方言の話者は、シベ方言以外の方言の話者より、人数が圧倒的に多いという現実もある。そのため、本論では、「満洲・シベ語」という新しい言語名を提案したい。

### 1.2.2.5. 泰来方言

#### [1] 使用地域

泰来方言の使用地域は、黒龍江省泰来県依布気村と温得村である（趙傑 1989；包聯群 2004）。

#### [2] 歴史

三家子方言の節で述べたように、金启琮（1981: 23-24）は1689年に將軍の薩布素は北側の国防のために寧古塔の満洲人を瓊瑋と墨爾根と齊齊哈爾という三箇所に移住させたということを記述している。

趙傑（1989: 4-5）によると、泰来方言の話者は齊齊哈爾に移住した満洲人の一部の人の後代である。

#### [3] 現状

趙傑（1989: 5）によれば、依布気村では、当時50代以上の満洲人はまだ泰来方言が話せた。当時30-40代の満洲人は少数話せるが、多くは聞き取れるだけである。当時20代以下の満洲人は話すことも、聞き取ることもできない。

包聯群（2004: 34）によれば、温得村に流暢な話者が2人いる。

#### [4] 先行研究

趙傑は泰来方言を調査する時、富英・富占柱・富香芹・葛英魁などの話者を調査した（趙傑 1989: 191）。趙傑（1987）は泰来方言の音韻論の記述である。趙傑（1989）は泰来方言の音韻論と形態論の記述である。音韻論の部分には趙傑（1987）の内容を含んでいる。趙傑（1990）はテキストの記録である。趙傑（2017）は三家子方言と泰来方言の音変化についての考察である。

包聯群は泰来県温得村の話者趙連子（男、1929年1月3日生）と張曉濤（女、1919年2月7日）を調査している（包聯群 2004）。

### 1. 2. 2. 6. 北京方言

#### [1] 使用地域

北京方言は北京で使われていた方言であり、中国語で書かれた先行研究では「京語」と呼ぶことが多い（瀛生 2004b: 221）。

#### [2] 歴史

北京方言は満洲人が北京に入関時から北京で口頭で使われた方言である（瀛生 2004b: 221）。

#### [3] 現状

瀛生（1998: 5）によると、北京方言は 20 世紀 20-30 年代に消滅した。

#### [4] 先行研究

(i) 瀛生（2004b: 250）によると、清国の年代に、当時の北京方言の実態を反映する本が発行されており、代表として 1730 年に出版された『清文啓蒙』があり、康熙時期の北京方言の発音を反映する記録と思われる。

(ii) Verbiest (1696) はラテン語で記述した古典語の文法概略であるが、その中に 17 世紀の口語での実際の発音（北京方言と思われる口語の発音）についての記述もある。

#### (iii) Amyot による文法書と辞書

Amyot (1787) はフランス語で記述した古典語の文法書であるが、当時の口語の発音（北京方言と思われる口語の発音）と古典語が一致しないところの記述もある。Amyot (1789) は 1000 頁を超える古典語の辞典である。フランス語で書かれている。この辞書の見出し語には、満洲文字とローマ字が共に使われるが、満洲文字とローマ字が一致しないところが多い。このような一致しないところは、当時の口語の実態をある程度反映している可能性が高い。

また、Verbiest (1696) と Amyot (1787; 1789) の記録にも相違点がある。このような相違点は、17 世紀と 18 世紀の間の北京方言の変化を反映している可能性がある。例えば、次のような例がある。

Verbiest (1696: 6) は古典語の yali 「肉」は、yeli のように発音すると記録している。これは、この語にある a の [ɛ] という異音を反映していると考えられる。一方、Amyot (1789) のローマ字表記は yenli である。ya における a の [ɛ] という異音を反映しているほか、n の音挿入も反映していると考えられる。この n の挿入は Verbiest (1696) には見られないが、Amyot (1787) には見られるため、18 世紀に起こった可能性が高いということが分かる。

また、古典語の gosi- 「慈しむ」は、Verbiest (1696: 6) は cogi- と記録しているが、Amyot (1787: 17) は koje- と記述している。語頭の g を c, k で記録しているのは、無声音を反映していると考えられる。s を g, j で記録しているのは、母音間の摩擦音の有声化を反映していると考えられる。また、2 音節目の母音の i から e への変化は、Verbiest (1696) には見られないが、Amyot (1787) には見られるため、18 世紀に北京方言に起こった変化の可能性が示唆される。

(iv) Langlès (1807) は主に満洲文字の紹介であるが、当時の口語に関する記述もある。

(v) Ikegami (1990) と池上 (1993) によると、古典語の *uwa* や *uwe* のような文字の発音が 1 音節かそれとも 2 音節かは、満洲文字では分からないが、18 世紀の朝鮮司訳院刊行の満洲語のハングル表記では、それを 2 通りの異なる表記で表しているため、ある程度推定できると述べている。すなわち、ハングル表記の記録で、満洲・シベ語の口語（当時の北京方言の可能性はある）が反映されることがある。Choy Hakkun (1980: 189) にも類似する考察がある。また、Ikegami (1990) と池上 (1993) の考えを引き継いだ研究として、和田 (2013) がある。

(vi) 『韃靼漂流記』は、1644 年に航海の途中難破して清国に漂着し、清国政府から保護を受けて北京へ連行されて、翌年日本へ送還された日本人による記録である（池上 1952: 44）。園田 (1939) は、『韃靼漂流記』諸本の満洲語異同表を挙げている。早田清冷 (2016) は、『韃靼漂流記』に基づいて、その当時（清国順治期）の口語について考察している。

(vii) 瀛生による研究

瀛生 (1987b; 1988b; 1989a; 1990; 1991; 1992; 1994; 1995; 1996; 1997; 1998; 1999; 2000; 2002; 2003; 2004a) は「談談満語的京語」（満洲語北京方言について話す）というタイトルの、北京方言についての記述のシリーズである。

また、瀛生 (2004b) は (i) 古典語と、(ii) 北京方言と、(iii) 満洲語が中国語に与える影響という 3 つの部分からなる。(ii) は上記の北京方言についての記述のシリーズとほぼ同じ内容であり、(iii) は下記の瀛生 (1993) とほぼ同じ内容である。なお、瀛生 (2014) は、鄭再帥・殷芳・辛格が、瀛生 (2004b) を再整理したものである。

ほかに、瀛生 (1986; 1987a; 1988a; 1989b; 1993) にも北京方言の発音に関する記録がある。瀛生 (1986; 1988a) は、古典語の教科書であるが、北京方言の発音についての記述もある。瀛生 (1987a) は、満洲語と中国語の互いの影響についての論文であるが、その前半に、中国語の影響によって発生した満洲語北京方言の発音の変化についての記述がある。瀛生 (1989a) は、北京方言における発音の変化と他の方言（アルチュカ方言とシベ方言）における発音の変化の類似性を考察している。瀛生 (1993) は中国語の北京方言における満洲語の要素に関する考察であるが、満洲語（北京方言の可能性はある）の発音の参考資料であると考えられる。

なお、瀛生 (1992: 1, 17) は、瀛生自身の先生である阿克敦布は (i) 北京方言の音変化と、(ii) 北京方言と他の諸方言との比較および方言の分け方、という 2 点に関して『徳岩居士清語雜録』を手書きで書いているが、文化大革命で遺失していると言及している。



瀛生の北京方言の記述には矛盾点と問題点がある。  
例えば、筆者は次のような矛盾点を見つけている。

瀛生の矛盾点1：古典語の *amsun* 「供物」の *s* は、北京方言では [ts] として発音することができるか、という点に関して矛盾がある。

瀛生(1993: 165)は、古典語の *amsun* は北京方言とラリン方言では [s] を [ts] のように発音できると述べている。

一方、瀛生(2002: 5)は、古典語の *amsun* は北京方言では *s* は *s* のままであり、[ts] のようには発音しないが、ラリン方言で *s* が [ts] に変化したのは、アルチュカ方言の影響によると述べている。

瀛生の矛盾点2：古典語の *bisaqa* 「出水した」の *s* は、北京方言では [ts] として発音することができるか、という点に関して矛盾がある。

瀛生(1990: 29)は、古典語の *bisaqa* の北京方言の同源語は [bits'aka] と述べている。

一方、瀛生(2002: 6)は、古典語の *bisaqa* の *s* は、北京方言では [ts'] のように発音しないと述べている。

瀛生の矛盾点3：古典語の *χala χacin* の北京方言の同源語(原文表記 *halai hacin*)の強勢の位置に関して矛盾がある。

瀛生(1992: 12)は、前の語の強勢は la にあり、後ろの語の強勢は *ha* にあると述べている。この記述に従うと、*ha'lai 'hacin* のようである。

一方、瀛生(1998: 1)は、2つの語のそれぞれの1音節目に強勢があると述べている。この記述に従うと、*'halai 'hacin* のようである。

瀛生の北京方言の記述には、上述した複数の矛盾点以外に、次のような問題点もある。

穆曄駿(1986a: 3)はアルチュカ方言の数詞を IPA (国際音声記号) と思われる形式で記録している。穆曄駿が記録したアルチュカ方言の 11-19 の言い方は、女真語と同源語であるようである(Kiyose 1977: 133 には女真語の数詞の形式がある)。ただし、古典語では、15 を除くと、10+1, 2…のような複合数詞を使う(Gorelova 2002: 201)。また、古典語の 11 月、12 月、正月十六日の言い方は、女真語の 11, 12, 16 の同源語である(戈思明 2014: 63-64)。

一方、北京方言の場合、瀛生(1989a: 10)によると、穆曄駿が挙げたアルチュカ方言の 11-19 は、北京方言の「掉坎兒」という名称の弓術の用語として用いられる単語に同源語がある。

女真語の 11-19 とアルチュカ方言と北京方言弓術用語と古典語における同源語を次の表のようにまとめた。

表 1-6 : 女真語の 11-19 とアルチュカ方言と北京方言弓術用語と古典語における同源語

女真語 Kiyose (1977: 133)	アルチュカ方言 穆曄駿 (1986a: 3, 8)	北京方言弓術用語 瀛生 (1989a: 10)	北京方言普通用語 瀛生 (1991: 8; 1992: 9)	古典語 戈思明 (2014: 63-64)
amšon 「11」	ənsə, ɔnsə 「11」	ense 「11」	omšon, omšong	omšon 「11月の11」
jirhon 「12」	tirgən 「12」	cion 「12」	(同源語不明)	jorgon 「12月の12」
gorhon 「13」	kəxə 「13」	kuo 「13」	(同源語不明)	(同源語が無い)
durhon 「14」	tuxu 「14」	tuhu 「14」	(同源語不明)	(同源語が無い)
tobohon 「15」	tʰɔfxə 「15」	towho 「15」	towohon 「15」	tofoxon 「15」
nilhon 「16」	niulxu 「16」	niolho 「16」	(同源語不明)	niolxun 「正月十六日」
darhon 「17」	təxəŋ 「17」	tohon 「17」	(同源語不明)	(同源語が無い)
niyuhun 「18」	niəkən 「18」	nioho 「18」	(同源語不明)	(同源語が無い)
oniyohon 「19」	kuniku 「19」	kuniu 「19」	(同源語不明)	(同源語が無い)

穆曄駿 (1986a) のアルチュカ方言の記録は、IPA を用いているようである。語頭では、モレンドルフ転写の d, g は穆曄駿 (1986a) の t, k に対応し、モレンドルフ転写の t, k は穆曄駿 (1986a) の tʰ, kʰ に対応する。したがって、穆曄駿 (1986a) が記録した 12, 13, 14, 15, 17, 19 の語頭子音はモレンドルフ転写では、それぞれ d, g, d, t, d, g であると考えられる。

一方、瀛生 (1989a) が用いているのは、IPA ではなく、モレンドルフ転写のようである。しかし、瀛生 (1989a) が記録した北京方言の弓術用語の 12, 13, 14, 17, 19 の語頭はそれぞれ c, k, t, t, k である。この点は非常に興味深い。瀛生が記録した北京方言の弓術用語と穆曄駿が記録したアルチュカ方言には、k と g, t と d のような対応が見られる。

筆者は次のような可能性を推測する。いわゆる北京方言の弓術用語は、瀛生 (1989a) が作った可能性がある。瀛生 (1989a) は、穆曄駿 (1986a) が記録したアルチュカ方言の形式に基づいて、北京方言の弓術用語の形式を作ろうとしているという可能性がある。瀛生は IPA とモレンドルフ転写の違いに意識していないようで、穆曄駿が用いた IPA の t, k を、モレンドルフ転写の t, k と混同したため、北京方言の弓術用語を作る時に上述した間違いをしたのではなかろうかと思われる。

#### (viii) その他

Tawney (2007) や Pak Unyong (1973) などにも北京方言の考察がある。

### 1.2.2.7. ラリン方言

#### [1] 使用地域

ラリン方言は、拉林倉の周りがある 24 の村で使われた (穆曄駿 1985: 5)。現在の五常県拉林鎮の周りの 8 つの郷、阿城県料甸子の周りの 5 つの郷、双城県の大部分の村、ハルビンの一部の村に相当する (穆曄駿 1986b: 2)。

#### [2] 歴史

ラリン方言の歴史に関して穆曄駿 (1985: 5; 1986b: 2) は次のことを記述している。1744 年、北京環城兵馬司より北京方言の一部の話者が北満洲に遣わ

されて、ラリン方言の話者となった。ラリン方言の話者は北満洲に到着した時点で、満洲語北京方言（後にラリン方言）と中国語北京方言の両方が話せた。後に中国語の話者が山東省からやって来た後、特に浜吉鉄道が敷かれた後、次第に中国語に移った。

### [3] 現状

現在、ラリン方言は消滅している。ラリン方言の消滅時期は、1967年である（穆曄駿 1985: 5）。

### [4] 先行研究

穆曄駿（1986b）はラリン方言の基礎語彙（約 400 語）と音変化を記述した。穆曄駿（1987a）はラリン方言の発音の特徴および十二字頭（満洲文字の音節）の古典語とラリン方言の比較表を記述している。

李書（1986）は古典語の *be* の複数の意味を考察する論文であるが、「鳥の餌」としての古典語の *be* はラリン方言では *we* と発音すると言及している。

瀛生（2002; 2003; 2004a; 2004b）は北京方言とラリン方言の基礎語彙集である。

## 1.2.2.8. 盛京南方言

### [1] 使用地域

瀛生（1991: 3）によると、盛京南方言の範囲は遼寧および吉林西部と南部である。これに基づく「盛京南」という用語は、「盛京以南」の意味ではなく、「盛京を中心とする南満洲」の意味のようである。

### [2] 歴史

瀛生（1998: 6）によると、建州方言の話者は 17 世紀到北京に行ったものと残ったものがいて、前者は北京方言の話者になり、後者は盛京南方言の話者になった。

瀛生（1991: 3, 10）は、盛京南方言と察布查爾のシベ方言は非常に類似しており、察布查爾のシベ方言と北京方言の類似度が 70% であると言え、察布查爾のシベ方言と盛京南方言の類似度が 90% であるというふうに述べている。

1.2.2.4. で述べたように、察布查爾のシベ人の先祖は 1700 年頃から 1764 年までの間に盛京に住んでいた。1700 年より前の間、そして 1764 年以降に、察布查爾のシベ方言の話者と盛京南方言の話者は同じ地域に居住していなかった。そのため、盛京南方言と察布查爾のシベ方言の間における、他の方言と比べて大きな類似性は、この 1700 年頃から 1764 年までの 60 年間余りの間に生じた可能性が高い。

瀛生（1991: 3）は自分が盛京南方言を聞いたと言及している。瀛生が生まれたのは 1922 年であるため、瀛生が盛京南方言を聞いた時間は 1922 年以降であると言える。1764 年から 1922 年以降までは、158 年もある。この 158 年以上の間に、察布查爾のシベ方言の話者と盛京南方言の話者は同じ地域に居住していない。すなわち、60 年間余りの間に生じた察布查爾のシベ方言と盛京南方

言の大きな類似性は、158年以上経たにもかかわらずかなり保たれていたということが分かる。

### [3] 現状

先行研究では、盛京南方言が消滅したか否かは言及されていない。しかし、盛京南方言の地域において現代の方言の報告がないため、盛京南方言が既に消滅している可能性が非常に高い。

前述したように、瀛生（1991: 3）は盛京南方言を聞いたことがあると言及している。但し、「聞いた」というのは、盛京南方言の母語話者から聞いたのか、それとも盛京南方言を習得した非母語話者から聞いたのかについては、瀛生は言及していない。もし母語話者から聞いたのであれば、盛京南方言は少なくとも瀛生が生まれる時（1922年）までには消滅していなかったことが分かる。

すなわち、盛京南方言の消滅時期が不明であるが、1922年以後に消滅した可能性がある。

### [4] 先行研究

瀛生（1991）は、基礎語彙における盛京南方言と他の方言（主にシベ方言）との発音の比較である。

## 1.2.2.9. 寧古塔方言

### [1] 使用地域

瀛生（1990: 22）によると、寧古塔方言の地域は寧古塔を中心とし、西側にアルチュカ方言の地域があり、東側は海であり、南西は盛京南の地域と隣接する。

### [2] 歴史

三家子方言の節で述べたように、金启琮（1981: 23-24）は三家子方言と黒河方言の話者は1689年に將軍の薩布素は北側の国防のために寧古塔の満洲人を瑗琿と墨爾根と齊齊哈爾という三箇所に移住させた人の子孫であると述べている。したがって、その時までには、三家子方言と黒河方言の話者の先祖は寧古塔に住んでいたことが分かる。

### [3] 現状

筆者は2012年に寧安県（旧名は寧古塔）にて現地調査したが、現地に母語話者は見つからなかった。現地の高齢者によると、現地に話者がいない。したがって、寧古塔方言はすでに消滅した可能性が高い。

筆者が現地調査する時に、現地に満洲のサマン（薩満）文化を引き継ごうとする運動が盛んでいるようであるが、この運動に携わっていた人は、みな母語が中国語である。このような人のうちに、寧安県海浪鎮伊蘭崗村出身の関玉林という名前の高齢者は、満洲語の能力があると言われる。しかし、筆者が調査に行った時に、関玉林氏は既に逝去していた。調査時に関玉林と同村の高齢者の関家凱（70代）によると、関玉林は満洲語の母語話者ではなく、古典語の習得者である。

寧古塔方言が消滅した時期は不明である。

服部（1941: 50）は吉林省の出身の満洲人の次のようなことを言ったのを記録している。

「烏拉街には満洲語をしれる者なし。（中略）寧古塔でも老人のみ話す。」

これに対して、服部は次のようにコメントしている。

「上はどの程度まで事実と一致するかはわからないけれども、この老人の話として興味がある故ここに記録した。」

すなわち、1940年代には、寧古塔に満洲語の母語話者がいた可能性があるが、事実とは限らないということが分かる。

一方、筆者の2012年の調査の時に、現地の関家凱氏（70代）は、次のようなことを言っている。和訳は筆者による。

「自分の両親はともに満洲人であるが、生前、満洲語の能力がなかった。私の知っている限り、ここにいる私の上の世代の人には、満洲語を母語とする人はいない。」

関家凱は70代の人で、関家凱の両親が生まれたのは百年前に近い時と言える。すなわち、少なくとも百年前までに現地に満洲語の話者がいない可能性が高いが分かる。

#### [4] 先行研究

##### (i) 『寧古塔記略』

瀛生（1990）によると、清国時代に呉振臣（1721）『寧古塔記略』は、寧古塔方言の一部の単語の発音を漢字で記録している。

##### (ii) 瀛生の記録

瀛生（1990）は呉振臣（1721）が記録した寧古塔の記述を引用するほかに、呉振臣（1721）の記録に見られない語も数多く記述した。これに関しては、瀛生（1990: 37）の注1には、次のような説明がある（和訳は筆者による）。

「阿克敦布先生は、師伝及び彼自分の調査により、満洲語の諸方言の発音に精通している。本文に挙げた寧古塔の語の発音は全て阿克敦布先生からの伝授によるものである。」

この注から分かるように、瀛生による寧古塔方言の記録は「阿克敦布」という名前の先生が教えたものであり、「阿克敦布」の寧古塔方言の知識は「師伝および彼自分の調査」から得たものである。しかし、「阿克敦布」は誰から寧古塔方言を勉強したか、いつどこで調査を行ったか、についての情報は記されていない。

### 1. 2. 2. 10. アルチュカ方言

#### [1] 使用地域

アルチュカ方言の使用地域は、寧古塔西部より東、伯都訥より西、通化・吉林より北、呼蘭・慶安より南である（穆曄駿 1985: 5）。

#### [2] 歴史

アルチュカ方言の歴史に関して穆曄駿（1985: 5）は次のようなことを記述している。康熙帝・乾隆帝の時期に、清国政府は満洲語の規範化措置をとったが、アルチュカ方言に与える影響が少ない。官署では規範語（古典語）、民間ではアルチュカ方言が使われ、両変種が併用された。中国語の話者が多く入って来た後、規範語（古典語）とアルチュカ方言のどちらも消えた。

#### [3] 現状

穆曄駿（1985: 5）は、1964年にアルチュカ方言の次の話者がいた、と記述した。

- (i) 関洪純。男性。1964年で71歳。巫溝郷疙疸木屯出身。バラ方言もできる。
- (ii) 何蘭芝。女性。アルチュカ方言の他、満洲族童謡と歌を歌うことができる。

#### [4] 先行研究

穆曄駿（1985）はアルチュカ方言の基礎語彙（約80語）の記録と音変化の記述である。穆曄駿（1986a）はアルチュカ方言の数詞と格標識についての記述である。穆曄駿（1988b）はアルチュカ方言の母音の音変化についての記述である。なお、池上（1993）は穆曄駿のアルチュカ方言とバラ方言のデータに基づいて若干の問題をめぐって考察している。

### 1. 2. 2. 11. バラ方言

#### [1] 使用地域

バラ方言は、張広才嶺の山地で使われた（穆曄駿 1985: 5）。穆曄駿が調査した67戸のバラ人は、双城、五常、阿城、延寿、尚志、方正、木蘭、呼蘭、通河、賓県、巴彦という11の県にいた（穆曄駿 1987b: 2）。

#### [2] 歴史

バラ方言の話者に関する記録は、清国の典籍には見られず、口頭の物語だけが残されているという（穆曄駿 1987b: 2）。

#### [3] 現状

バラ方言は消滅している。消滅時期は1982年である（穆曄駿 1985: 5）。

#### [4] 先行研究

穆曄駿は1964-1977年の間に67戸の74人を訪れた（穆曄駿 1987b: 2）。74人のうち、19人の70-80代の人のみがバラ方言が話せた（穆曄駿 1987: 5）。穆曄駿（1987b）はバラ方言の話者の概要、バラ方言の基礎語彙（約300語）と格標識の記述である。穆曄駿（1988a）はバラ方言の音素と音変化の記述で

ある。なお、池上（1993）は穆曄駿のアルチュカ方言とバラ方言のデータに基づいて若干の問題をめぐって考察している。

#### 1. 2. 2. 12. 吉林省の方言

服部（1941）は吉林省吉林市および吉林省松原市扶余県の方言の基礎語彙（それぞれ 100 語程度と 40 語程度）を記述している。吉林市の方言の話者は春福氏（1940 年に 67 歳）という。扶余県の方言の話者は徳克錦保氏という。

後藤（1994）は吉林省永吉県烏拉街満族鎮を調査したが、話者の報告はない。

趙傑（2000）は中国吉林省延辺朝鮮族自治州琿春市内および三家子満族郷、楊泡満族郷、哈達門郷の古老が覚えている 20 個余りの満洲語の語句と、満洲語の祭祀用語・歌謡と、満洲語に起源する地名についての記述である。趙傑（2000: 19）によると、2000 年の時点で延辺方言を若干使用する 90 歳位の老婦人がいたが、他の者は少しの単語と、薩満祭詞、満洲族歌謡しか分からなかった。

#### 1. 2. 2. 13. 『ニシャン・サマン伝』の地域の方言

##### [1] 『ニシャン・サマン伝』の紹介

河内（1987: 141-145）は『ニシャン・サマン伝』について次のように紹介している。『ニシャン・サマン伝』は満洲を含めたツングース系民族の間に語り伝えられた口誦文学で、ツングース民族の中から生まれた固有の作品である。満文『ニシャン・サマン』は複数の手稿本がある。ロシア民族研究所東方学檔案室には 3 種類の手稿本、中国には 1 本、ドイツには数種の本がある。

河内（1987）によると、ロシアの第 2 手稿本の 2 巻のタイトルにある sama「薩満」は、古典語の saman と語末の n の有無が異なる。筆者の黒河での調査では、「薩満」を表す語は黒河方言の話者 K-1 は sama [ˈtsʰa:ma] のように発音している。すなわち、『ニシャン・サマン伝』のロシアの第 2 手稿本と筆者が調査した黒河方言の「薩満」という語は、2 音節目の n が脱落しているという共通点がある。

また、河内（1987）は第 3 手稿本を和訳するとき、古典語と綴りが異なるところを指摘している。古典語との違いには、方言の特徴の現れという可能性があると考えられる。筆者が調査した三家子方言と黒河方言は、第 3 手稿本に現れた方言の特徴の箇所と類似するところがある（5.3.2.2. と 5.3.3.2. を参照されたい）。

#### 1. 2. 2. 14. その他の変種

清瀬（1984: 54）は、アメリカカリフォルニア州（モントレイ市？）に一族の話者がいるようであると言及している。ただし、この情報自体は清瀬が他人から聞いた二次的情報であり、しかも、データがないため、どの方言に近いかは不明である。

#### 1. 2. 3. 各時代の方言の分布のまとめ

前述した各方言の変遷をまとめると、次の表のようになる。

表 1-7：各方言の変遷

17 世紀		18 世紀		19～20 世紀		現在
満洲北部				バラ方言		絶滅
				アルチュカ方言		
満洲南部	建州方言等 ＞北京方言 (古典語の基盤)		北京方言	北京方言		絶滅
			1743 年に一部の話者が阿城に派遣された (穆曄駿 1986: 2)	ラリン方言		
	盛京南方言	1701 年に伯都訥のシベ人が盛京に派遣された。 1764 年に盛京の一部のシベ人が新疆へ派遣された (Gorelova 2002: 31-35)		盛京南方言		存続
満洲西部	シベ方言			シベ方言		
満洲東部	寧古塔方言	寧古塔方言			絶滅	
		1689 年頃に一部の話者がチチハルと黒河に派遣された (金启琮 1981: 23, 河野 1944=1979: 544)		嫩江方言	三家子方言 泰来方言	存続
	その他東部方言		黒河方言		絶滅	
延辺方言						
		吉林方言 扶余方言				

図で表すと、次のようになる。

次図では、バラ方言・アルチュカ方言・寧古塔方言以外の東部方言を略す。

次図は google の地図を白地図として使った。





(i) 1644 年～1689 年



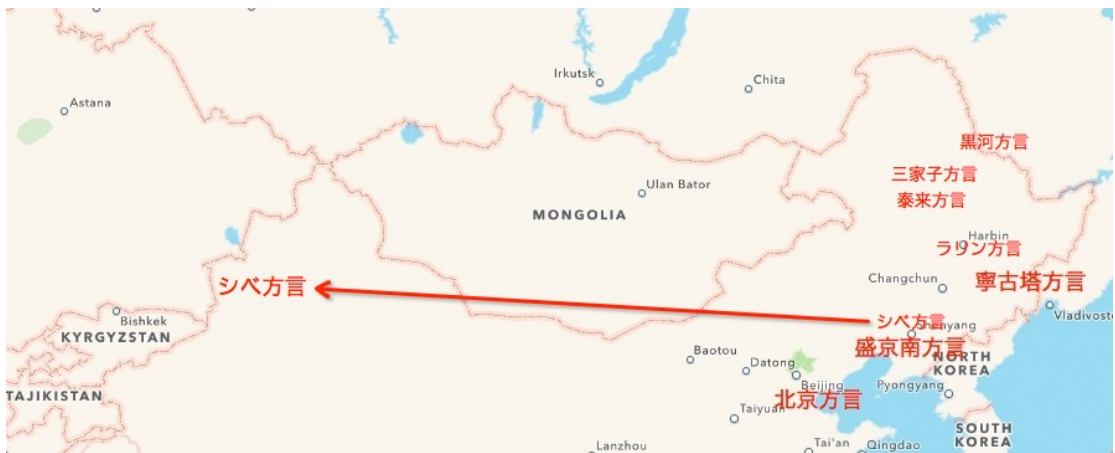
(ii) 1689 年～1701 年



(iii) 1701 年～1743 年



(iv) 1743 年～1764 年



(v) 1764 年以降



(vi) 現在

図 1-1 : 各方言の変遷  
(google の地図を白地図として使った)

#### 1. 2. 4. 方言間の語彙の相違の例

次に方言間の語彙の相違の例を挙げる。

[1] 同じ意味を表すのに異なる方言で同源語を用いない場合

(1-1) 「とうもろこし」

CM	aiɣa šušu	
Sa	axšuse	古典語の aiɣa šušu と同源語
K	ošušu	古典語の aiɣa šušu と同源語
Si	bolmo < byolmo < bolmi'	中国語「苞米」から

三家子方言の axšuse と黒河方言の ošušu は、古典語の aiɣa šušu と同源語であると考えられる。a...u は黒河方言では規則的に逆行円唇同化が発生する (5.3.4.1. を参照されたい)。シベ方言の場合は筆者の調査では bolmo [bɔɪ'mɔ:] (話者 Si-15)、byolmo [b'ɔɪ'mɔ:] (話者 Si-1)、bolmi' [bɔɪ'mi:] (話者 Si-2) などの形式がある。1930-40 年代の調査に基づく山本 (1969: 13) の記録は boləmii [bɔlmi:] (本論表記では bolmi') であり、筆者が調査した話者 Si-2 の発音と類似する。山本は bolmi' の語源に言及していないが、筆者は中国語方言の「苞米」baomi (意味はとうもろこし) と推測する<sup>4</sup>。

(1-2)	CM	Sa	K	Si
(a) 「陰茎」	coco	šuma [ʃu'ma:] <sup>5</sup>	cucku [ˈtʂʰutʂʰkʰu] <sup>6</sup>	meme' [mi'mi:]
(b) 「陰門」	fefe	fewe [ˈfɣ:wɣ]	fewe [ˈfɣ:wɣ]	fewe [fif]

上記の例から分かるように、男性の性器は、方言によって同源語が用いられない。一方、女性の性器は、同源語が用いられる。

(1-3) 「餃子」

Sa	byaNše	< 中国語「扁食」 <sup>7</sup>
K	ayji' eweN	< ayji' 「小さい」 + eweN 「小麦粉食品」
Si	jyawse	< 中国語「餃子」

<sup>4</sup> なお、シベ方言のいわゆる書面語では bolimo の綴りであるが、語源的情報が反映されないようである。

<sup>5</sup> 三家子方言の šuma 「陰茎」の古典語の同源語は šuman 「馬の陰茎」である。三家子方言の šuma 「陰茎」のシベ方言の同源語 sumaN は普通、複合語 sike sumaN 「膀胱」で用いる。

<sup>6</sup> 黒河方言の cucku 「陰茎」は、Udighe 語の čičko 「陰茎」と Nanai 語の čičiqo 「急須の口」の形式と非常に類似する。Udighe 語と Nanai 語のこの 2 つの語形は Starostin et al. (2003) による。

<sup>7</sup> この語源は恩和巴図 (1995: 19) による。

[2] 異なる方言の同源語の意味が異なる場合

(1-4)

CM	šukila-	「角で突く ; 拳で殴る」
Sa	šukya	「角」
K	syukya	「角」
Si	syukwaN	「拳」

上記の例から分かるように、古典語の šukila- の šuki の部分は三家子方言と黒河方言とシベ方言に同源語がある。したがって、šukila- の la の部分は動詞化接辞 la- のようである。すなわち、šukila- は šuki の動詞化によると考えられる。ただし、語基の šuki は語として『五体清文鑑』などの古典語の辞書には記録されていない。すなわち、šuki は古典語では単独では用いないようである。一方、šuki の三家子方言・黒河方言・シベ方言における同源語は語として残っている。ただし、三家子方言・黒河方言では「角」、シベ方言では「拳」のように、片方の意味しか残っていない。

なお、「角」を表すのに、三家子方言と黒河方言とシベ方言ではそれぞれ šukya と syukya と wixe を用いるが、wixe は šukya, syukya と同源語ではないと考えられるため、前述した「同じ意味を表すのに異なる方言で同源語を用いない場合」の例であると考えられる。

(1-5)

古典語	dergi	「東」	wargi	「西」
北京方言	dergi	「東」	wargi	「西」
三家子方言	dilgi'	「西」	waylgi'	「東」
泰来方言	[terki]	「西」	[verkə]	「東」
黒河方言	dilyxi	「西」	waylyxi	「東」
シベ方言	dirxe	「西」	wyarxe	「東」
アルチュカ方言	diergi	「西」	wailgi	「東」

上記の三家子方言・黒河方言・シベ方言のデータは筆者の調査による。泰来方言のデータは趙傑 (1989: 90, 119) による。北京方言とアルチュカ方言のデータは穆曄駿 (1987b: 12) による。この違いの生じる理由に関しては、恩和巴図 (1995: 17-18) と長山・熊南京 (2010) と戈思明 (2014: 316-344) は考察している。

前に述べたように、古典語と北京方言は満洲南部の方言である。三家子方言と泰来方言と黒河方言は寧古塔方言に由来するが、寧古塔方言は満洲東部の方言であった。シベ方言はもともと満洲の西部にあった。アルチュカ方言は満洲北部の方言である。したがって、この「東」と「西」の意味の差異の地理的分布は、満洲南部方言と満洲南部以外の違いのようである。

### 1.3. 研究方法とデータ

#### [1] 現地調査でデータを入手

筆者は黒龍江省齊齊哈爾市富裕県三家子屯と、黒龍江黒河市卡倫山・大五家子（紅色辺疆農場・下馬場）・四季屯・四嘉子・藍旗営と、新疆ウイグル自治区の察布查爾と伊車嘎善にて、次の話者を調査した。

表 1-8 : informant 一覧

	年齢	性別	出身
話者 Sa	80代	女性	齊齊哈爾市富裕県三家子屯
話者 K-1	80代	女性	黒河市下馬廠
話者 K-2	80代	男性	黒河市下馬廠
話者 K-3	80代	男性	黒河市卡倫山
話者 K-4	60代	女性	黒河市小烏斯里
話者 K-5	50代	女性	黒河市藍旗営
話者 K-6	50代	女性	黒河市藍旗営
話者 Si-1	30代	男性	察布查爾 1 郷
話者 Si-2	70代	女性	察布查爾 5 郷
話者 Si-3	40代	男性	察布查爾 5 郷（伊寧市育ち）
話者 Si-4	30代	男性	察布查爾 2 郷
話者 Si-5	30代	男性	察布查爾 7 郷
話者 Si-6	60代	男性	察布查爾 3 郷
話者 Si-7	30代	男性	察布查爾 3 郷
話者 Si-8	70代	男性	察布查爾 8 郷
話者 Si-9	20代	男性	察布查爾 8 郷
話者 Si-10	30代	男性	察布查爾 6 郷
話者 Si-11	60代	男性	伊車嘎善
話者 Si-12	60代	女性	伊車嘎善
話者 Si-13	40代	女性	伊車嘎善
話者 Si-14	40代	男性	伊車嘎善
話者 Si-15	30代	女性	察布查爾 6 郷
話者 Si-16	50代	男性	察布查爾 7 郷

話者 K-6 は話者 K-5 の姉である。話者 Si-11 と話者 Si-12 は、話者 Si-4 の妻の両親である。話者 Si-13 は話者 Si-12 の妹である。話者 Si-14 は話者 Si-12 の妹の夫である。

なお、次のような、満洲・シベ語の母語話者以外の人からも言語の使用状況などの情報を得た。

石君広：30代男性。話者 Sa の孫。富裕県三家子村満洲語学校の教師。

関家凱：70代男性。牡丹江市寧安県海浪鎮伊蘭崗村にて調査。

劉飛熊：30代男性。別名：哈蘇台。話者 Si-4 と共に瑟公錫滿文化伝播中心の運営者。

## [2] 満洲・シベ語の方言同源語の辞書の編集

管見の限り、これまで満洲・シベ語の方言の同源語の辞書はない。そこで、筆者は本論を執筆すると同時に、満洲・シベ語の諸方言の同源語の辞書である王海波（未刊）『満洲・シベ語方言同源語辞典』を編集している。この辞書の作成によって、古典語から各方言の同源語の発音を調べる事が可能になる。より詳しい紹介は王海波（2015）で発表した。

### 1.4. 本章のまとめ

本章では、まず満洲・シベ語の系統と各変種の使用地域・歴史・現状・先行研究を紹介した上で、各時代の方言の分布と変遷をまとめ、最後に、筆者が調査したインフォーマントについて紹介した。

第2章から第6章（p39 から p206）につきましては、学位授与日から5年以内に、今後刊行予定の内容を含むため、インターネットでの公表を差し控えさせていただきます。

著者

## 第7章：むすび

本論文では、筆者の現地調査により得られたデータに基づいて、満洲・シベ語の現代方言（三家子方言・黒河方言・シベ方言）の音韻論を記述し、古典語と現代方言の音韻論の比較に関する考察を行った。

第1章と第2章はそれぞれ満洲・シベ語の概要と形態論の概説である。第1章では、まず満洲・シベ語の系統と各変種の使用地域・歴史・現状・先行研究を紹介した上で、各時代の方言の分布と変遷をまとめ、最後に、筆者が調査したインフォーマントについて紹介した。第2章では、接語、屈折接辞、語形成（派生・複合・重複）、および言語接触による借用語・語形成・意味範囲の変化について概説した。

第3章は現代方言の分節的音韻論に関する考察である。第3章の前半では、現代方言の音素と異音について考察した。まず三家子方言、黒河方言、シベ方言のそれぞれの音素・異音と、方言間における異音の分布の違いについて考察した上で、音素設定上の次のような4つの問題点について考察した。(i) いわゆる二重母音は「母音+母音」か、それとも「母音+子音」か、(ii) シベ方言の [ji] の音韻表記を ye と yi のどちらにするか、(iii) シベ方言の語頭の yu [jy] と uy [ʔy] の音素設定の問題、(iv) 音声的に現れない高母音の音韻表記の問題である。

第3章の後半では、現代方言の音素配列論について考察した。(i) 語における一般的な音素配列の制約、(ii) 音節構造の制約、(iii) 音節境界を跨ぐ場合の子音連続の制約、という3点に分けて考察を行った。(i) では、現代方言の語頭・語末に現れ得ない音素を挙げた上で、現代方言の全体・語頭・語中・語末における障害音音素・共鳴音音素・母音音素の出現頻度をまとめた。(ii) に関しては、現代方言の音節頭と音節末尾における子音音素の数の制約を考察した上で、 $V_1C_1C_2V_2$  ( $C_2 = w/y$ ) における音節の切れ目などの問題について考察した。また、各現代方言について、各音節数ごとに語における音節の種類による出現頻度の違いをまとめた上で、頻度の高い音節のパターンについての考察を試みた。(iii) に関しては、音節境界を跨ぐ場合の子音連続の可能性をまとめた上で、どのような子音連続が存在しないかについて考察した。特に三家子方言と黒河方言では「障害音+共鳴音」があり得るが、シベ方言では1例の借用語を除いてあり得ないという方言間の差異を明らかにした。

第4章は現代方言の超分節的音韻論に関する考察である。第4章の前半では、現代方言の強勢について考察した。まず強勢音節のピッチの違いに注目することにより、強勢を、高いピッチの強勢と低いピッチの強勢に分類した。次に、強勢の位置について考察した。最後に、強勢の数の違いによる複合語（1つの語）と句（2つの語）の違い、および形態論的語と音韻論的語の違いについて考察した。

第4章の後半では、現代方言の母音調和について考察した。まず先行研究で提案されている母音調和の研究の枠組み（母音調和と *metaphony* の違い、および母音調和の分類）を紹介した。次に、共起と同化の分析を通じて、現代方言における母音のグルーピングの可能性を考察した。この考察から、従来から現代方言において母音調和と見なされてきた現象は、典型的な母音調和とはかなり異なる性質を示しているということを明らかにした。特に、三家子方言とシ



べ方言には円唇性に係わる同化があるが、同化の範囲が隣接音節のみにあるため、母音調和より *metaphony* に近い性質を示している。

第5章は古典語と現代方言の分節的音韻論の比較に関する考察である。第5章の前半では、古典語と現代方言の比較に基づいて、子音の変化・母音の変化・重音脱落・音位転換などについて考察した。以下が主な考察結果である。

(1) 古典語と現代方言における軟口蓋音と口蓋垂音の分布について検討することで、次のような条件においては弁別があることがわかった。(i) 低母音を含まない語幹に後続する完了接辞において、(ii) 語幹の母音の変化が先行する場合の完了接辞において、(iii) 語根内において。そのうち、(iii) に関しては、さらに4つの環境を設定し、環境の変化によって軟口蓋音と口蓋垂音のいずれが現れるかを考察した。

(2) 硬口蓋音とそれに対応する音について考察することで、満洲・シベ語には口蓋化の例の他に、逆口蓋化(硬口蓋音が非硬口蓋音になる変化)の例もあることを明らかにした。古典語と一部の現代方言の同源語には、*ci* と *ki* の対応と、*ji* と *gi* の対応を示す例がある。ツングース諸語における同源語ではそれぞれ *ti* と *di* が対応することを踏まえ、*\*ti > ci > ki* と *\*di > ji > gi* のように先に口蓋化が起こり、次にまた逆口蓋化が起こったという可能性を指摘した。

(3) *ŋ* と *i/y* の調音点の同化について考察することで、次のようなことを明らかにした。*ŋ* と *i/y* は、連続する場合に調音点の同化が起こり得るが、方言によって同化の方向が異なる場合がある。北京方言では、*ŋ* の調音点(軟口蓋)が *i/y* の調音点(硬口蓋)に同化されるが、三家子方言とシベ方言では、*i/yV* の調音点(硬口蓋)が *ŋ* の調音点(軟口蓋)に同化される。一方、黒河方言ではこのような同化が起こっていない。

(4) 語頭における *y* の挿入について考察することで、*i* で始まる古典語の語と同源の関係にあるシベ方言の語の語頭に *y* が挿入されるか否かは、古典語の語に歯擦音があるかないかに関係がある可能性を指摘した。

(5) 母音の円唇性の同化について考察することで、(i) *a...u* は黒河方言では規則的に逆行円唇同化が起こるが、他の方言では起こらない場合もある、(ii) *u* と *a* の間の軟口蓋・口蓋垂子音が唇音化される場合があることを指摘した。

(6) *si* と *še* の対応について考察することで、*si > še* の有無と規則性は、方言によって、また、*si* の位置によって異なることを明らかにした。

(7) 母音の脱落について考察することで、屈折接辞の前における高母音の脱落の可能性と、共鳴音の前における高母音の脱落の可能性は、方言によって異なることを明らかにした。

(8) 音位転換について考察することで、音位転換は音素配列論的制約に関係する場合と、品詞に関係する場合があるということを示した。

第5章の後半では、古典語と現代方言を対応させつつ、音素配列の違いについて、(i) 語における一般的な音素配列の制約の違い、(ii) 音節構造の制約の違い、(iii) 音節境界を跨ぐ場合の子音連続の制約の違い、という3点に分けて考察を行ったが、特に(ii)と(iii)に重点を置いて論じた。(ii)に関しては、音節末尾における共鳴音の連続の変化の考察を通じて、古典語の「半母音+鼻音」の音節末尾は三家子方言・黒河方言・シベ方言では消失したか、または減少する傾向にあるが、古典語に見られない「半母音+流音」の音節末尾はシベ方言に存在することを明らかにした。(iii)に関しては、音節境界を跨ぐ「阻害

音＋共鳴音」は古典語にはほとんどないが、現代の三家子方言と黒河方言に観察される一方、音節境界を跨ぐ「n＋軟口蓋・口蓋垂子音」は古典語にはほとんどないが、現代のシベ方言には見られることを指摘した。

第6章は古典語と現代方言の超分節的音韻論の比較に関する考察である。第6章の前半では、現代方言における低いピッチを伴う強勢を生じさせる要因について考察した。その結果、(i) 聞こえ度の差異による強勢の移動、(ii) 低いピッチで始まる音節の次の音節の1つの子音への融合、という2つの要因を明らかにした。

第6章の後半では、古典語よりも早い段階（pre-古典語）から古典語を経て現代方言に至るまで、母音調和がどのような変遷を経たかについて考察した。この考察によって、pre-古典語の [±RTR] の母音調和は、現代方言に至るまでの過程で次第にグルーピングが崩れてきたこと、および現代の三家子方言とシベ方言には体系的な円唇性の *metaphony* が出現していることを明らかにした。また、女真語、満洲・シベ語の古典語、現代方言を比較した結果、母音調和の特性を持つ接辞は、金国の女真語から明国の女真語および満洲・シベ語の古典語を経て現代方言に至るまで、次第にその数が減る傾向にあることを明らかにした。

本論では、現代方言の音韻論と、古典語と現代方言の音韻論比較について考察した。しかし、5.1. で言及したように、古典語の複数の変種の違いと、古典語の変種間の差異と現代方言との対応については扱っていない。これらの問題に関しては、残された問題としてこれからの課題としたい。

## 用語索引

- 移動接辞, 50, 54, 87-88, 100, 154-155, 181, 187, 203-205  
イントネーション, 59, 69-70, 73, 76, 81, 89, 93  
オノマトペ, 76, 177  
音位転換, 107, 157-159  
音韻的語, 96-97  
格接語, 29-31, 34-35, 50, 54-55, 60, 64, 70, 77, 96, 112, 137-138, 185-186, 189, 205  
完了接辞, 36, 50, 55, 73, 93, 99-104, 110, 121-124, 127, 154, 156-157, 158-159, 186-189, 193-195, 200-203, 203-205  
完了相連用接辞, 36, 59-60, 114-115  
逆口蓋化, 128-131, 176  
旧情報接語, 33-34  
強勢, 89-90  
    高いピッチの強勢, 90-94  
    低いピッチの強勢, 94-96  
継続性, 111  
    破裂音の摩擦音化, 48, 53-54, 59-60  
    破裂音の摩擦音/接近音化, 110-113  
    摩擦音の破擦音化, 47, 53, 65-66, 74  
    破擦音の摩擦音化, 63-64  
言語接触, 43-45, 113, 121, 176-177  
限定接語, 34-35  
口蓋化, 48, 53, 58, 65-66, 74, 77, 81, 127-128, 132-133  
子音連続, 75, 82, 83-88, 157, 159, 181-184  
使役接辞, 39-42, 50, 54, 91, 100, 112, 175, 205  
借用語, 43-44, 58, 61-62, 74-75, 75, 76-77, 82, 87, 98, 107, 109, 113, 117-118, 141, 161, 163, 165-166, 177  
重複, 43, 71  
条件接辞, 38, 175  
進行相接辞, 36, 59-60, 93  
成節的子音, 95-96, 187-192  
重音脱落, 155-157  
程度接辞, 38, 63  
動詞化接辞, 26, 39, 113  
半母音, 67-71, 76-77, 82, 177-181  
複合, 25, 43, 47, 53, 77, 92, 96, 171  
母音調和, 97-104, 192-206  
母音連続, 77, 172, 177  
翻訳借用, 44  
未完了接辞, 35-36, 50, 54-55, 95-96, 138-139, 154, 178-180, 186-192  
未完了相連体接辞, 36, 110, 156-157, 204-205  
未完了相連用接辞, 36  
無声化, 59  
名詞句化接語, 31-33, 141  
モダリティ接語, 35, 36, 60, 93, 155-156  
モダリティ接辞, 36-37  
有声化, 13, 47, 53, 58, 65-66, 75, 116-119, 155-156  
流音, 49, 54, 60-61, 68-69, 118-121, 163-167, 171, 181

## 参考文献

(アルファベット順<sup>8</sup>)

- Adam, Lucien. (1873) *Grammaire de la Langue Mandchou*. Paris: Maisonneuve.
- Amyot, Joseph Marie. (1787) *Grammaire Tartare-Mantchou: Tirée du Tome XIII Des Mémoires Concernant l'Histoire, les Arts, les Sciences, etc. des Chinois*. Paris: Nyon.
- Amyot, Joseph Marie. (1789) *Dictionnaire Tartare-Mantchou François, Composé d'après un Dictionnaire Mantchou-Chinois, Rédigé et publié avec des additions et l'Alphabet de cette langue, par L. Langlès*. Paris: F.R. Ambr. Didot l'Ainé.
- 安俊 (1985) 「錫伯語言文字乃滿語滿文的繼續」 『滿語研究』 1: 41-47.
- 安双成 (1993) 『滿漢大辭典』 瀋陽: 遼寧人民出版社.
- Anderson, Gregory D.S. (2003) Towards a phonological typology of native Siberia. In: Dee Ann Holisky & Kevin Tuite (eds.), *Current Trends in Caucasian, East European and Inner Asian Linguistics: Papers in honor of Howard I. Aronson*. 1-22. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Anderson, Stephen R. (1980) Problems and perspectives in the description of vowel harmony. In: Robert M. Vago (ed.), *Issues in Vowel Harmony*. 1-48. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Aoki, Haruo. (1968) Toward a typology of vowel harmony. *International Journal of American Linguistics*. 34: 142-145.
- Ard, Josh. (1984) Vowel harmony in Manchu: a critical overview. *Journal of Linguistics*. 20: 57-80.
- 包聯群 (2004) 「黒龍江省泰来県温得村滿語調研報告」 『滿語研究』 39: 34-40.
- 包聯群 (2015) 「消滅の危機に瀕する満州語の社会言語学的研究」 包聯群 (編) 『現代中国における言語政策と言語継承 (第二巻)』 127-176. 東京: 三元社.
- Bauer, Laurie. (2003) *Introducing Linguistic Morphology (2nd Edition)*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Blevins, J. (1995) The syllable in phonological theory. In: J. Goldsmith (ed.), *The Handbook of Phonological Theory*. 206-244. Oxford: Blackwell.
- Bloomfield, Leonard. (1933) *Language*. New York: Henry Holt and Company.
- Booij, Geert E. (1996) Inherent versus contextual inflection and the split morphology hypothesis. In: Geert Booij & Jaap van Marle (eds.), *Yearbook of Morphology 1995*. 1-15. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.

---

<sup>8</sup> 日本語の訓令式ローマ字・中国語の拼音・ハングルのイェール式ローマ字・ラテン文字 (英語・仏語・獨語・羅語) のアルファベット順で配列する。ハングルの翻字は原則としてイェール式ローマ字を用いるが、Kim Juwon と Ko Dongho と Ko Seongyeon の綴りは Kim et al. (2008) と Ko Seongyeon (2012) にすでにあるため、それに従う。

- Bulatova, Nadezhda & Lenore Grenoble. (1999) *Evenki (Languages of the World: Materials 141)*. München: Lincom Europa.
- 昌盛 (1991) 「滿語与錫伯語關係芻議」『中央民族學院學報』1991.1: 68-70.
- 長山・熊南京 (2010) 「滿語口語 *dərgi*、*wərgi* 来源探析」『滿語研究』51: 28-30.
- 朝克 (1997) 『滿通古斯諸語比較研究』北京：民族出版社.
- Choy Hakkun. (1980) *Althaiehaknonko*. Seoul: Hyenmwunsa.  
[崔鶴根 (1980) 『알타이語學論攷』서울: 玄文社.]
- Choy Hakkun. (1990) *Cungpohankwukpangensacen*. Seoul: Myengmwuntang.  
[崔鶴根 (1990) 『增補韓國方言辭典』서울: 明文堂.]
- Clark, Larry V. (2006) A Bibliography of Manchu-Tungus Dictionaries. In: Larry V. Clark & Hartmut Walravens (eds.), *Bibliographies of Mongolian, Manchu-Tungus, and Tibetan Dictionaries*. 112- 172. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Clements, G. N. (1990) The role of the sonority cycle in core syllabification. In: J. Kingston & M. E. Beckman (eds.), *Papers in Laboratory Phonology I: Between the Grammar and the Physics of Speech*. 283-333. Cambridge: Cambridge University Press.
- Coblin, Weldon South. (2005) A note on the pronunciation of the Manchu vowel *e*. *Journal of the American Oriental Society*. 125(3): 403.
- 戴光宇 (2003) 「三家子滿語口語集合數詞詞綴 *-veli* 考」『滿語研究』36: 41-45.
- 戴光宇 (2012) 『三家子滿語語音研究』北京：北京大學出版社.
- Duanmu, San. (2007) *The Phonology of Standard Chinese (2nd edition)*. Oxford: Oxford University Press.
- 恩和巴圖 (1992) 「三家子滿語詞彙」『民族語文』1992(3): 41-49.
- 恩和巴圖 (1995) 『滿語口語研究』呼和浩特：內蒙古人民出版社.
- 恩和巴圖 (1997a) 「滿語口語聯係動詞 *gu-*」『民族語文』1997(3): 61-64.
- 恩和巴圖 (1997b) 「論滿語口語格形態及其意義」『滿語研究』25: 3-11, 67.
- Enhebatu. (1998) The conjunctive verb *gu-* in spoken Manchu language. *Althaihakpo*. 8: 35-42.
- Fuente, José Andrés Alonso de la. (2013) Written Manchu *akjan* ‘thunder’. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hung.* 66(1): 59-68.
- 福田昆之 (2008) 『增訂滿洲語文語辭典』橫濱：FLL.
- 高荷紅・石君広 (2013) 「黑龍江省三家子村滿語傳承人調查研究」『滿語研究』56: 65-74.
- 戈思明 (2014) 『錫伯族傳承滿文之研究』中華文化大學博士學位論文.
- Gorelova, Liliya M. (2002) *Manchu Grammar*. Leiden: Brill.
- 後藤智子 (1994) 「烏拉街探訪」『滿族史研究通信』4: 73-38.
- Greenberg, Joseph Harold. (1963) Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements. In: Joseph Harold Greenberg (ed.), *Universals of Language*. 73-113. London: MIT Press.
- 郭孟秀 (2003) 「黑河地區滿語使用現狀調查研究」『滿語研究』37: 82-88.

- 羽田亨 (1937) 『満和辞典』 京都：京都帝国大学満蒙古調査会刊。
- 服部四郎 (1941) 「吉林省に満洲語を探る」 『言語研究』 7/8: 47-67.
- 服部四郎 (1946) 『蒙古字入門』 東京：龍文書局。
- 服部四郎・山本謙吾 (1955) 「満洲語の一人称複数代名詞」 『言語研究』 29: 19-29.
- 服部四郎・山本謙吾 (1956) 「満洲語口語の音韻の体系と構造」 『言語研究』 30: 1-29.
- Hauer, Erich. (1952-1955) *Handwörterbuch der Mandschusprache*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz Verlag.
- 早田清冷 (2015) 『古典満洲語属格標識 -i の研究』 東京大学人文社会系研究科博士論文。
- 早田清冷 (2016) 「日本語話者によって記録された順治期満洲語：予備的考察」 2016年3月26日ユーラシア言語研究コンソーシアム2015年次総会口頭発表。
- Hayata, Teruhiro. (1980) Non-abstract vowel harmony in Manchu. *Gengo Kenkyu*. 77: 59-79.
- 早田輝洋 (1985a) 「錫伯語調査ノートより」 『九大言語学研究室報告』 6: 23-35.
- 早田輝洋 (1985b) 「シボ語について」 『月刊 言語』 14-7: 94-99.
- 早田輝洋 (1990) 「満洲語文語の漢字音について——『満文金瓶梅』を資料として——」 『九大言語学研究室報告』 11: 1-8.
- 早田輝洋 (1996) 「満洲語文語における二つの tere」 『アジア・アフリカ文法研究』 25: 1-11.
- 早田輝洋 (1998) 「満洲語文語における文字表記と音韻についての一報告」 *Althaihakpo*. 8: 55-76.
- 早田輝洋 (1999) 「満洲語文語における《只》を意味する幾つかの単語について」 『内陸アジア言語の研究』 14: 117-138.
- 早田輝洋 (2003) 「満洲語の母音体系」 『九州大学言語学論集』 23: 1-10.
- 早田輝洋 (2005) 「満洲語の指示代名詞と指示形容詞——『満文金瓶梅』を中心に——」 『満族史研究』 4: 114-140.
- 早田輝洋 (2008a) 「満洲語の格標識は附属語か接辞か」 寺村政男・久保智之・福盛貴弘 (編) 『語学教育フォーラム』 16: 1-9.
- 早田輝洋 (2008b) 「間接目的語と直接目的語との語順」 寺村政男・久保智之・福盛貴弘 (編) 『語学教育フォーラム』 16: 11-19.
- 早田輝洋 (2008c) 「満洲語の音節構造——音節節約を中心にして——」 寺村政男・久保智之・福盛貴弘 (編) 『語学教育フォーラム』 16: 21-51.
- 早田輝洋 (2010a) 「満洲語と満洲文字」 寺村政男・福盛貴弘 (編) 『語学教育フォーラム』 24: 1-35.
- 早田輝洋 (2010b) 「『満文原檔』の表記に現れた種々の問題——第1冊 荒字檔・戻字檔を中心にして——」 寺村政男・福盛貴弘 (編) 『語学教育フォーラム』 24: 37-91.
- 早田輝洋 (2010c) 「『満文原檔』における n と Ø の交替」 寺村政男・福盛貴弘 (編) 『語学教育フォーラム』 24: 93-104.

- 早田輝洋 (2010d) 「『満文原檔』における若干の語彙など」寺村政男・福盛貴弘 (編) 『語学教育フォーラム』 24: 105-114.
- 早田輝洋 (2010e) 「満洲語の形式名詞 *ngge* と *ningge*」寺村政男・福盛貴弘 (編) 『語学教育フォーラム』 24: 115-122.
- 早田輝洋 (2012) 「初期満洲語の円唇母音」久保智之・林徹・藤代節 (編) 『地球化時代におけるアルタイ諸語の急速な変容・消滅に関する総合的調査研究 (CSEL 18 号)』 69-83. 九州大学人文科学研究院言語学研究室.
- 早田輝洋・寺村正男 (2004) 『大清全書 増補改訂・附満洲語漢語索引 満洲語索引篇』 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 何栄偉 (2010) 「対錫伯語附加成分 *-mak* 的探析」 *Althaihakpo*. 20: 41-54.
- 賀忠徳 (1994) 「今日新疆錫伯族」察布查爾錫伯自治県語委 (編) 『錫伯文化研究』.
- 胡增益 (1994) 『新満漢大詞典』 烏魯木齊: 新疆人民出版社.
- 黄錫恵 (2001) 「満語口語研究的重音問題」 『満語研究』 32: 17-20.
- I Kimwun. (1973) 18seykiuy mancwue pangen calyo. *Cintanhakpo*: 36: 100-132.  
[이기문 (1973) 「18世紀의 滿洲語 方言 資料」 『震檀學報』 36: 100-132.]
- 池上二良 (1955) 「トゥングース語」市河三喜・服部四郎 (編) 『世界言語概説 (下巻)』 443-488. 東京: 研究者.
- Ikegami, Jiro. (1974) Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen. In: Georg Hazai & Peter Zieme (ed.), *Sprache, Geschichte und Kultur der Altaischen Völker*. 271-272. Berlin: Akademie Verlag.
- 池上二良 (1988) 「ラートロフ採録満州語伊犁方言テキスト訳解: キルギズの物語 (1)」 『札幌大学女子短期大学部紀要』 12: 1-16.
- 池上二良 (1989) 「ラートロフ採録満州語伊犁方言テキスト訳解: キルギズの物語 (2)」 『札幌大学女子短期大学部紀要』 14: 17-30.
- Ikegami, Jiro. (1990) Significance of Korean materials in the study of Manchu. *Althaihakpo*. 2: 71-77.
- 池上二良 (1991) 「ラートロフ採録満州語伊犁方言テキスト訳解: キルギズの物語 (3)」 『札幌大学女子短期大学部紀要』 17: 27-46.
- 池上二良 (1993) 「満洲語方言研究における穆曄駿氏採集資料について」 『言語文化接触に関する研究』 5: 1-24.
- 池上二良 (1999) 「満州語の動詞語尾 *-ci* 及び *-cibe* について」 『満洲語研究』 258-271. 東京: 汲古書院.
- 池上二良 (2001) 「ツングース語の変遷」 『ツングース語研究』 397-445. 東京: 汲古書院.
- 張泰鎬 (2008) 『錫伯語語法』 昆明: 云南民族出版社.
- 季永海 (2003) 「瀕危的三家子満語」 『民族語文』 2003(6): 39-43.
- 季永海・白立元 (1990) 「三家子村満語与漢語的關係」 中央民族学院少数民族語言文学三系少数民族語言研究所 (編) 『漢語与少数民族語關係研究』 1990年増刊: 219-237.
- 季永海・劉憲景・屈六生 (1986) 『満語語法』 北京: 民族出版社.

- 季永海・劉憲景・屈六生 (1989) 『現代滿語八百句』北京：民族出版社.
- 郝勛 (2013) 「シベ語の方向を表す格について—— -ci と -de を中心に ——」 『北海道大学大学院文学研究科 研究論集』 13: 137-157.
- 郝勛 (2014) 「シベ語テキスト：手延べ麵とシベ風パンの作り方」 『北方言語研究』 4: 199-212.
- Jin Ning. (1993) *Sibe-English Conversations*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- 姜小莉 (2009) 「何世環『音姜薩滿』調査及整理」 『滿語言文化研究通訊』 1: 50-52.
- 金炳喆・金寧 (1992) 『錫伯語漢語會話』烏魯木齊：新疆人民出版社.
- 金启琮 (1981) 『滿族的歷史与生活：三家子屯調查報告』哈爾濱：黑龍江人民出版社.
- 金启琮 (1984) 『女真文辭典』北京：文物出版社.
- 金启琮・烏拉熙春 (1994) 「女真語与滿語關係淺議」 『民族語文』 1994(1): 11-16.
- Kałużyński, Stanisław. (1977) *Die Sprache des Mandschurischen Stammes Sibe aus der Gegend von Kuldsha, Band 1, F. Muromskis Sibenische Texte, Band 2, Wörterverzeichnis*. Warszawa: Państwowe Wydawnictwa Naukowe.
- 加藤直人 (1991) 「富裕県三家子村調査記録」 『滿族史研究通信』 1: 10-12.
- 加藤直人 (1994) 「土爾伯特蒙古族自治県の滿洲語關係調査」 『滿族史研究通信』 4: 69-73.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) (1996) 『言語学大辞典第6卷』東京：三省堂.
- 河内良弘 (1987) 「ニシャン・サマン伝 訳注」 『京都大学文学部研究紀要』 26: 141-230.
- 河内良弘 (1996) 『滿洲語文語文典』京都：京都大学学術出版会.
- 河内良弘 (2014) 『滿洲語辞典』東京：松香堂書店.
- Kim Juwon. (1989) *Mancwu Thwungkwusuceyeyu Moumcohwa Yenkwu*. PhD dissertation. Seoul National University.  
[김주원 (1989) 『만주 통구스체어의 모음조화 연구』 서울대학교 박사논문.]
- Kim Juwon. (1990) *Mancwue moumcheykyeyuy pyencheney tayhaye. Althaihakpo*. 2: 1-26.  
[김주원 (1990) 「만주어 모음체계의 변천에 대하여」 『알타이학보』 2: 1-26.]
- Kim Juwon. (1996) *Mancwuthwungkwusueuy censelmoumuy paltaley tayhaye. Althaihakpo*. 6: 25-35.  
[김주원 (1996) 「만주통구스어의 전설모음의 발달에 대하여」 『알타이학보』 6: 25-35.]
- Kim, Juwon & Dongho Ko & D O Chaoke & Youfeng Han & Lianyu Piao & B. V. Boldyrev. (2008) *Materials of Spoken Manchu*. Seoul: Seoul National University Press.
- Kim Tongso. (1996) *Sekpaykcok ene yenkwu sesel. Althaihakpo*. 6: 1-24.



- [金東昭 (1996) 「錫伯族 言語 研究 序説」 『알타이학보』 6: 1-24.]
- 木村滋雄 (2000) 『シベ語音韻論』 北海道大学修士論文.
- 木村滋雄 (2001) 「シベ語の複数接尾辞 -s について」 『環北太平洋の言語』 7: 177-192.
- 木村滋雄 (2002) 「シベ語のピッチアクセントについて」 『環北太平洋の言語』 8: 51-61.
- 木村滋雄 (2003) 「シベ語の助数詞について」 『環北太平洋の言語』 10: 49-67.
- 木村滋雄 (2004) 「シベ語の数量詞遊離について」 『環北太平洋の言語』 11: 115-150.
- 木村滋雄 (2005) 「シベ語の名詞接尾辞 -ni について」 『環北太平洋の言語』 12: 175-184.
- 清瀬義三郎則府 (1973) 「女真音再構成考」 『言語研究』 64: 12-43.
- Kiyose, Gisaburo Norikura. (1977) *A Study of the Jurchen Language and Script: Reconstruction and Decipherment*. Kyoto: Horitsubunkasha.
- 清瀬義三郎則府 (1984) 「満洲語の口蓋化音 /s/ と [ʃ] と」 『言語研究』 86: 54-68.
- Kiyose, Gisaburo Norikura. (1997) The collapse of palatal-velar harmony from Jurchen to Manchu. *Historical and Linguistics Interaction between Inner-Asia and Europe. Studia Uralo-Altaica*. 39: 147-150.
- Kiyose, Gisaburo Norikura. (1998) Dialectal lineage from Jurchen to Manchu. *Central Asiatic Journal*. 42: 123-127.
- Kiyose, Gisaburo Norikura. (2000) Genealogical relationship of Jurchen dialects and literary Manchu. *Central Asiatic Journal*. 44: 177-189.
- Ko Dongho. (1999) Samkacamancueuy i yeykitonghwa. *Althaihakpo*. 9: 11-38.  
[高東昊 (1999) 「삼가자 (三家子) 만주어의 i 예기 동화」 『알타이학보』 9: 11-38.]
- 高東昊 (2009) 「満洲語口語研究の方法と問題点」 2009年06月19日東京大学言語学研究室口頭発表.
- Ko Seongyeon. (2012) *Tongue Root Harmony and Vowel Contrast in Northeast Asian Languages*. PhD dissertation. Cornell University.
- 児倉徳和 (2016) 「シベ語における動作主性と知識管理：試論」 2015年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会口頭発表. 2016年3月26日.
- 児倉徳和 (2018) 『シベ語のモダリティの研究』 東京：勉誠出版.
- 河野六郎 (1944=1979) 「満洲国黒河地方に於ける満洲語の一特色」 『河野六郎著作集 第1巻』 東京：平凡社.
- Krämer, Martin. (2003) *Vowel Harmony and Correspondence Theory*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- 久保智之 (1988) 「錫伯語 (満洲語口語) の若干の基礎語彙についての報告」 『九大言語学研究室報告』 9: 79-94.
- 久保智之 (1989) 「錫伯語 (満洲語口語) 資料——民話『ほうきとたわしと猫の話』——」 『九大言語学研究室報告』 10: 107-124.

- 久保智之 (1993) 「シベ語 (満洲語口語) 音韻論のための覚え書き——語末に [ɔ] が出現するいくつかの場合——」『言語文化接触に関する研究——シンポジウム「満洲語の言語学的・文献学的研究」——』5: 25-43.
- Kubo, Tomoyuki. (1997) “Come” and “Go” in Sive Manchu. *Saksaha A Review of Manchu Studies*. 2: 19-24.
- 久保智之 (2000) 「シベ語 (満洲語口語) のテキストと若干の音韻論的考察」『人間科学』6: 17-34.
- Kubo, Tomoyuki. (2004) /i/ vs. /yi/ distinction in Sive Manchu? In: Carsten Naehrer (ed.), *Proceedings of the 1st International Conference of Manchu-Tungus Studies. Vol.2: Trends in Tungusic and Siberian Linguistics*. 107-107. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Kubo, Tomoyuki. (2005) “Inclusive/Exclusive” distinctions in Sive (Spoken Manchu) and Khalkha Mongolian. *Kyushu University Papers in Linguistics*. 25/26: 255-270.
- Kubo, Tomoyuki. (2008) A sketch of Sibe phonology. *Gogaku Kenkyuu Fooramu*. 16: 127-142.
- 久保智之 (2009) 「シベ語」『月刊言語』38: 88-93.
- Kubo, Tomoyuki. (2011) Sibe Intonation. In: *Proceedings of the 10<sup>th</sup> Seoul International Altaistic Conference - Reexaminations of Objects and Methods of Research into the Altaic Languages and Cultures*. 89-98. Sunchon National University.
- 久保智之・児倉徳和・庄声 (2011a) 『2011 年度言語研修シベ語テキスト1 シベ語の基礎』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 久保智之・児倉徳和・庄声 (2011b) 『2011 年度言語研修シベ語テキスト2 シベ語語彙集』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 窪菌晴夫 (1998) 「モーラと音節の普遍性」『音声研究』2(1): 5-15.
- 窪菌晴夫・本間猛 (2002) 『音節とモーラ』東京：研究社.
- 栗林均 (1989) 「ダグル語」『亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) 『言語学大辞典第2巻』597-603. 東京：三省堂.
- 楠木賢道 (1992) 「チャプチャルのシボ族について」『満族史研究通信』2: 22-24.
- Langlès, Louis. (1807) *Alphabet Mantchou: Rédigé d'après le Syllabaire et le Dictionnaire. Universel de cette Langue*. Paris: De L'Imprimerie Imperiale.
- Li Bing. (1993) *A Re-analysis of the Vowel System of Classical Manchu*. ms. Universiteit van Amsterdam.
- Li Bing. (1996) *Tungusic Vowel Harmony: Description and Analysis*. The Hague: Holland Academic Graphics.
- 李兵 (1999) 「満語元音系統的演変与原始阿爾泰語元音系統的重新構擬」『民族語文』1999(3): 12-24.
- 李兵 (2004) 「現代満語唇輔和円唇元音的交互作用」『民族語文』2004(2): 1-12.

- Li, Gertraude Roth. (2010) *Manchu: A Textbook for Reading Documents*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- 李虹 (2003) 『富平方言研究』陝西師範大學碩士學位論文。
- 李榮 (編) (1993-2003) 『現代漢語方言大詞典』南京：江蘇教育出版社。
- 李書 (1986) 「談滿語中的 be」『滿語研究』2: 54-57.
- 李樹蘭 (1997) 「錫伯語內部差異和促發語言演變的要素」『民族語文』1997(1): 69-75.
- 李樹蘭·仲謙 (1986) 『錫伯語志』北京：民族出版社。
- 李樹蘭·仲謙 (1992) 「富裕滿語和錫伯語」『語言與翻譯』32: 35-38.
- 李樹蘭·仲謙 (1993) 「富裕滿語和錫伯語 (續)」『語言與翻譯』33: 57-61.
- 李樹蘭·仲謙·王慶豐 (1984) 『錫伯語口語研究』北京：民族出版社。
- 劉景憲·吳寶柱·蔣理 (1997) 「搶救滿語迫在眉睫——三家子滿族村滿語現狀調查報告」『滿語研究』1997(2): 68-71.
- 劉正愛 (2009) 「黑龍江省三家子村追蹤調查」『滿語研究』2009(1): 27-34.
- Malchukov, Andrej L. (1995) *Even (Languages of the World: Materials 12)*. München: Lincom Europa.
- 滿都呼·段瑞淵·宋肅瀛·李清 (1985) 「黑龍江愛輝縣大五家子鄉大五家子村滿族調查報告」『滿族社會歷史調查』瀋陽：遼寧人民出版社。
- Möllendorff, P. G. von. (1892) *A Manchu Grammar with Analysed Texts*. Shanghai: American Presbyterian Mission Press.
- 穆鴻利 (1995) 「女真語與滿語之比較研究」『滿語研究』20: 56-68.
- 穆曄駿 (1985) 「阿勒楚喀滿語語音簡論」『滿語研究』2: 5-15.
- 穆曄駿 (1986a) 「阿勒楚喀滿語的數詞與格助詞」『滿語研究』2: 2-17.
- 穆曄駿 (1986b) 「拉林滿語語音概論」『滿語研究』3: 2-30.
- 穆曄駿 (1987a) 「十二字頭拉林口語讀法解」『滿語研究』4: 16-50.
- 穆曄駿 (1987b) 「巴拉語」『滿語研究』5: 2-31, 128.
- 穆曄駿 (1988a) 「論巴拉語的語音變化」『滿語研究』6: 1-26, 93.
- 穆曄駿 (1988b) 「阿勒楚喀滿語元音發聲的音變特點」『滿語研究』7: 1-24.
- 中嶋幹起 (1998) 「滿洲語」東京外國語大學語學研究所 (編) 『世界の言語ガイドブック (アジア・アフリカ地域)』341-357. 東京：三省堂。
- Norman, Jerry. (1974) A sketch of Sibe morphology. *Central Asian Journal*. 18: 159-174.
- Norman, Jerry. (2013) *A Comprehensive Manchu-English Dictionary*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Pak Unyong. (1973) *Mancwuemwuneyenkwu (I)*. Taykwu: Hyengselchwulphansa.  
[朴恩用 (1973) 『滿洲語文語研究 (二)』大邱：螢雪出版社.]
- 清格爾泰 (1982=1998) 「滿洲語口語語音」『清格爾泰民族研究文集』232-355. 北京：民族出版社。
- 清格爾泰 (1985) 「關於滿洲文字母第六元音的讀音」『滿語研究』1: 34-36.
- 清格爾泰 (2000) 「三家子屯滿洲語調查の思いで」(楠木賢道翻譯) 『滿族史研究通信』9: 1-6.

- Radloff, W. (1893) *Aus Sibirien, Lose Blätter aus meinem Tagebuche*. Leipzig: T. O. Weigel Nachfolger.
- Rice, Keren. (1987) Inflection inside derivation: an Athapaskan case. *Toronto Working Papers in Linguistics*. 8: 80-94.
- Robins, Robert Henry. (1964) *General Linguistics: An Introductory Survey*. Bloomington: Indiana University Press.
- Selkirk, E. (1984) On the major class features and syllable theory. In: Aronoff M. & Oehrle R. (eds.), *Language Sound Structure: Studies in Phonology*. Cambridge: MIT Press. 107-136.
- Seng Paykin. (1976) Mancwue umwunsa yenkwulul wihaye (kiil). *Enehak*. 1.  
[성백인 (1976) 「滿洲語 音韻史 研究를 위하여 (其一)」 『언어학』 1.]
- Seng Paykin. (1981) *Mancwue Umwunlon Yenkwu*. Seoul: Myengcitayhakchwulphanpwu.  
[성백인 (1981) 『만주어 음운론 연구』 서울: 明知大学出版部.]
- Seng Paykin. (1990) Choki mancwue sacentuley tayhan enehakcek yenkwu. *Althaihakpo*. 2: 27-69.  
[성백인 (1990) 「初期 滿洲語 辭典들에 대한 언어학적 연구」 『알타이학보』 2: 27-69.]
- Seng Paykin. (1996) Kwumancwutanguy jisamiwa manpwunnotanguy kijimi. *Althaihakpo*. 6: 37-46.  
[성백인 (1996) 「《舊滿洲檔》의 jisami 와 《滿文老檔》의 kijimi」 『알타이학보』 6: 37-46.]
- Shibatani, Masayoshi. (1976) The grammar of causative constructions: a conspectus. In: Masayoshi Shibatani (ed.), *The Grammar of Causative Constructions*. 1-40. New York: Academic Press.
- Shirokogoroff, Sergei Mikhailovich. (1924) *Social Organization of the Manchus*. Shanghai: Royal Asiatic society.
- Sihler, Andrew L. (1995) *New Comparative Grammar of Greek and Latin*. New York and Oxford: Oxford University Press.
- 園田一龜 (1939) 『韃靼漂流記の研究』 奉天: 南滿洲鐵道株式会社.
- Starostin, Sergej & Anna Dybo & Oleg Mudrak. (2003) *Etymological Dictionary of the Altaic Languages*. Brill: Leiden.
- 蘇德善 (1984) 「關於“吉甫西”語的探討——兼論錫伯語与滿語的關係——」 『新疆社会科学』 1984.2: 152-154.
- 田村実造・今西春秋・佐藤長 『五体清文鑑訳解』 京都: 京都大学文学部内陸アジア研究所.
- Tawney, Brian. (2007) *Reading Jakdan's Poetry: An Exploration of Literary Manchu Phonology*. A.M. Thesis. Harvard, RSEA.
- 佟加慶夫 (1992) 「現代錫伯語新詞術語規範問題」 『語言与翻譯』 32: 43-46.
- 佟加慶夫 (1999) 「現代錫伯語新詞術語的演變」 『滿語研究』 29: 69-76.
- 佟克力 (1989) 『錫伯族歷史与文化』 烏魯木齊: 新疆人民出版社.

- 佟中明 (1998) 「俄国学者 Ф·В·穆羅夫斯基搜集記錄的錫伯族民間故事」『民族文学研究』1: 88-92.
- 佟中明 (2005) 「俄国著名学者 В·В·拉德洛夫用錫伯語複述記錄的民間故事」『民族文学研究』3: 60-63.
- Trask, R. L. (1996) *A Dictionary of Phonetics and Phonology*. New York: Routledge.
- Verbiest, Ferdinand. (1696) *Elementa Linguæ Tartaricæ*. In: Melchisédec Thévenot (ed.), *Relations de Divers Voyages Curieux*. 3-34. Paris: A Paris.
- 和田景子 (2013) 「『漢清文鑑』における滿洲語のハングル表記——特に滿洲語の文字連続 CVwV を中心に——」寺村政男 (編) 『大東文化大学日本語学科 20 周年記念論文集』244-255. 大東文化大学日本語学科.
- 王海波 (2009) 『滿洲語三家子方言の基礎的記述』東京大学人文社会系研究科修士論文.
- 王海波 (2011a) 「滿洲語三家子方言における母音調和の存在に関する考察」『北方言語研究』1: 79-99.
- 王海波 (2011b) 「滿洲語三家子方言の使役構文における被使役者に関する考察」『東京大学言語学論集』31: 335-345.
- 王海波 (2011c) 「三家子滿洲語の声調について」ユーラシア言語研究コンソーシアム 2010 年次総会口頭発表. 2011 年 2 月 19 日.
- Wang Haibo. (2013) Emergence of the tone system in the Sanjiazi dialect of Manchu. In: Ritsuko Kikusawa & Lawrence A. Reid. (eds.), *Historical Linguistics 2011: Selected Papers from the 20th International Conference on Historical Linguistics, Osaka, 27-31 July 2011*. 101-113. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 王海波 (2015) 「滿洲語方言同源語辞書の構築——編集の進捗状況および通時的音韻論研究における応用について——」ユーラシア言語研究コンソーシアム 2014 年次総会口頭発表. 2015 年 3 月 27 日.
- 王海波 (2016) 「滿洲語口語における音素交替と語幹の境界について」ユーラシア言語研究コンソーシアム 2015 年次総会口頭発表. 2016 年 3 月 26 日.
- 王海波 (未刊) 『滿洲・シベ語方言同源語辞典』.
- 王慶豊 (1984) 「愛輝滿語概況」『民族語文』29: 55-66.
- 王慶豊 (2005) 『滿語研究』北京: 民族出版社.
- 烏拉熙春 (1989) 「錫伯語和滿語書面語某些語音的比較」『民族語文』6: 61-68.
- 烏拉熙春 (1990) 「滿語元音的變化」『民族語文』4: 57-65.
- 烏拉熙春 (1992) 『滿洲語語音研究』京都: 玄文社.
- 烏拉熙春 (1995) 「滿語支語言的鬆緊元音」『民族語文』1995.2: 33-39.
- 烏拉熙春 (1996) 「滿語語言文字的發展演變」『愛新覺羅氏三代滿学論集』402-413. 呼和浩特: 遠方出版社.
- 烏拉熙春 (1997) 「滿語支語言中的過渡音」『民族語文』1997.1: 52-62.
- 吳元豊 (1998) 「清初錫伯族居住区域与相隣民族的關係」『黒龍江民族叢刊』1998(3): 77-80.

- 吳振臣 (1721) 『寧古塔紀略』.
- 山本謙吾 (1969) 『滿洲語口語基礎語彙集』 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Yen Kyutong. (1994) Mancwueuy kyeylyangenehakcek yenkwu  
 —————hanchengmwunkamul cwungsimulo—————. *Althaihakpo*. 4:  
 67-96.  
 [연규동 (1994) 「만주어의 계량언어학적 연구 —————漢清文鑑을  
 중심으로—————」 『알타이학보』 4: 67-96.]
- 瀛生 (1986) 『滿語讀本』 梅河口：吉林教育出版社.
- 瀛生 (1987a) 「滿語和漢語的互相影響」 『滿族研究』 1987(1): 67-72.
- 瀛生 (1987b) 「談談滿語的京語 (一) 第一部分 京語音變 第二部分 京語的口語」 『滿語研究』 4: 2-15, 73.
- 瀛生 (1988a) 『速成自學滿語基礎講義』 北京：民族出版社.
- 瀛生 (1988b) 「談談滿語的京語 (二) 第三部分 京語口語的演變」 『滿語研究』 7: 25-34.
- 瀛生 (1989a) 「談談滿語的京語 (三) 第四部分 京語与諸語」 『滿語研究』 8: 4-20.
- 瀛生 (1989b) 「从滿族共同體的人員組成看滿語京語音變」 『滿族研究』 1989(2): 55-65.
- 瀛生 (1990) 「談談滿語的京語 (四) 第五部分 京語与宁古塔語」 『滿語研究』 11: 22-37.
- 瀛生 (1991) 「談談滿語的京語 (五) 第六部分 京語与盛京南滿語」 『滿語研究』 13: 3-16.
- 瀛生 (1992) 「談談滿語的京語 (六) 第七部分 京語的變音和常音」 『滿語研究』 15: 1-17.
- 瀛生 (1993) 『北京土話中的滿語』 北京：北京燕山出版社.
- 瀛生 (1994) 「談談滿語的京語 (七) 第八部分 單詞入句 (一)」 『滿語研究』 18: 15-23, 36.
- 瀛生 (1995) 「談談滿語的京語 (八) 第八部分 單詞入句 (二)」 『滿語研究』 20: 13-20.
- 瀛生 (1996) 「談談滿語的京語 (九) 第八部分 單詞入句 (二) 續」 『滿語研究』 22: 1-12, 144.
- 瀛生 (1997) 「談談滿語的京語 (十) 第八部分 單詞入句 (三)」 『滿語研究』 24: 3-14.
- 瀛生 (1998) 「談談滿語的京語 (十) 第八部分 單詞入句 (三) 續」 『滿語研究』 26: 1-10.
- 瀛生 (1999) 「談談滿語的京語 (十一) 第八部分 單詞入句 (四) 上」 『滿語研究』 28: 5-19.
- 瀛生 (2000) 「談談滿語的京語 (十二) 第八部分 單詞入句 (四) 下」 『滿語研究』 30: 1-17.

- 瀛生 (2002) 「談談滿語的京語 (十三) 第八部分 單詞入句 (五) 上」 『滿語研究』 34: 3-8.
- 瀛生 (2003) 「談談滿語的京語 (十四) 第八部分 單詞入句 (五) 中」 『滿語研究』 36: 3-14.
- 瀛生 (2004a) 「談談滿語的京語 (十五) 第八部分 單詞入句 (五) 下」 『滿語研究』 38: 5-11.
- 瀛生 (2004b) 『滿語雜識』 北京: 學苑出版社.
- 瀛生 (2014) 『滿語口語音典』 北京: 華芸出版社.
- 張雷軍 (1994) 「遷徙對錫伯族歷史發展的影響」 『內蒙古社會科學 (文史哲版)』 1994(1): 44-48.
- Zhang Xi. (1996) *Vowel Systems of the Manchu-Tungus Languages of China*.  
Doctoral dissertation. University of Toronto.
- 趙阿平·郭孟秀·唐戈 (2002) 「滿通古斯語族語言文化搶救調查———富裕縣三家子滿族語言文化調查報告」 『滿語研究』 2002(2): 39-44.
- 趙傑 (1987) 「泰來滿語音位解析」 『滿語研究』 4: 51-66.
- 趙傑 (1989) 『現代滿語研究』 北京: 民族出版社.
- 趙傑 (1990) 「滿漢對照口語訳例」 『滿語研究』 11: 124-126.
- 趙傑 (2000) 「延邊滿語掇拾」 『民族語文』 2000(3): 18-24.
- 趙傑 (2017) 「富裕縣三家子滿語與泰來縣依布氣滿語及其音變的時間序列」 『黑龍江社會科學』 160: 118-121.
- 趙金純 (1986) 「初探三家子滿語中『時』的表示法」 『滿語研究』 2: 49-55.
- 中國錫伯族雙語研究編委會 (2004) 『中國錫伯族雙語研究』 烏魯木齊: 新疆科學技術出版社.
- Zikmundová, Veronika. (2013) *Spoken Sibe: Morphology of the Inflected Parts of Speech*. Chicago: University of Chicago Press.

(別紙 1)

## 論文の内容の要旨

論文題目：満洲・シベ語現代方言音韻論

氏 名：王 海波

本論文では、筆者の現地調査により得られたデータに基づいて、満洲・シベ語の現代方言（三家子方言・黒河方言・シベ方言）の音韻論を記述し、古典語と現代方言の音韻論の比較に関する考察を行った。

第1章と第2章はそれぞれ満洲・シベ語の概要と形態論の概説である。第1章では、まず満洲・シベ語の系統と各変種の使用地域・歴史・現状・先行研究を紹介した上で、各時代の方言の分布と変遷をまとめ、最後に、筆者が調査したインフォーマントについて紹介した。第2章では、接語、屈折接辞、語形成（派生・複合・重複）、および言語接触による借用語・語形成・意味範囲の変化について概説した。

第3章は現代方言の分節的音韻論に関する考察である。第3章の前半では、現代方言の音素と異音について考察した。まず三家子方言、黒河方言、シベ方言のそれぞれの音素・異音と、方言間における異音の分布の違いについて考察した上で、音素設定上の次のような4つの問題点について考察した。(i) いわゆる二重母音は「母音+母音」か、それとも「母音+子音」か、(ii) シベ方言の [jɪ] の音韻表記を ye と yi のどちらにするか、(iii) シベ方言の語頭の yu [jy] と uy [ʔy] の音素設定の問題、(iv) 音声的に現れない高母音の音韻表記の問題である。

第3章の後半では、現代方言の音素配列論について考察した。(i) 語における一般的な音素配列の制約、(ii) 音節構造の制約、(iii) 音節境界を跨ぐ場合の子音連続の制約、という3点に分けて考察を行った。(i) では、現代方言の語頭・語末に現れ得ない音素を挙げた上で、現代方言の全体・語頭・語中・語末における阻害音音素・共鳴音音素・母音音素の出現頻度をまとめた。(ii) に関しては、現代方言の音節頭と音節末尾における子音音素の数の制約を考察した上で、 $V_1C_1C_2V_2$  ( $C_2 = w/y$ ) における音節の切れ目などの問題について考察した。また、



各現代方言について、各音節数ごとに語における音節の種類による出現頻度の違いをまとめた上で、頻度の高い音節のパターンについての考察を試みた。(iii)に関しては、音節境界を跨ぐ場合の子音連続の可能性をまとめた上で、どのような子音連続が存在しないかについて考察した。特に三家子方言と黒河方言では「阻害音+共鳴音」があり得るが、シベ方言では1例の借用語を除いてあり得ないという方言間の差異を明らかにした。

第4章は現代方言の超分節的音韻論に関する考察である。第4章の前半では、現代方言の強勢について考察した。まず強勢音節のピッチの違いに注目することにより、強勢を、高いピッチの強勢と低いピッチの強勢に分類した。次に、強勢の位置について考察した。最後に、強勢の数の違いによる複合語（1つの語）と句（2つの語）の違い、および形態論的語と音韻論的語の違いについて考察した。

第4章の後半では、現代方言の母音調和について考察した。まず先行研究で提案されている母音調和の研究の枠組み（母音調和と *metaphony* の違い、および母音調和の分類）を紹介した。次に、共起と同化の分析を通じて、現代方言における母音のグルーピングの可能性を考察した。この考察から、従来から現代方言において母音調和と見なされてきた現象は、典型的な母音調和とはかなり異なる性質を示しているということを明らかにした。特に、三家子方言とシベ方言には円唇性に係わる同化があるが、同化の範囲が隣接音節のみにあるため、母音調和より *metaphony* に近い性質を示している。

第5章は古典語と現代方言の分節的音韻論の比較に関する考察である。第5章の前半では、古典語と現代方言の比較に基づいて、子音の変化・母音の変化・重音脱落・音位転換などについて考察した。以下が主な考察結果である。

(1) 古典語と現代方言における軟口蓋音と口蓋垂音の分布について検討することで、次のような条件においては弁別があることがわかった。(i) 低母音を含まない語幹に後続する完了接辞において、(ii) 語幹の母音の変化が先行する場合の完了接辞において、(iii) 語根内において。そのうち、(iii) に関しては、さらに4つの環境を設定し、環境の変化によって軟口蓋音と口蓋垂音のいずれが現れるかを考察した。

(2) 硬口蓋音とそれに対応する音について考察することで、満洲・シベ語には口蓋化の例の他に、逆口蓋化（硬口蓋音が非硬口蓋音になる変化）の例もあることを明らかにした。古典語と一部の現代方言の同源語には、*ci* と *ki* の対応と、*ji* と *gi* の対応を示す例がある。ツングース諸語における同源語ではそれぞれ *ti*

と di が対応することを踏まえ、\*ti > ci > ki と \*di > ji > gi のように先に口蓋化が起り、次にまた逆口蓋化が起こったという可能性を指摘した。

(3) η と i/y の調音点の同化について考察することで、次のようなことを明らかにした。η と i/y は、連続する場合に調音点の同化が起こり得るが、方言によって同化の方向が異なる場合がある。北京方言では、η の調音点（軟口蓋）が i/y の調音点（硬口蓋）に同化されるが、三家子方言とシベ方言では、i/yV の調音点（硬口蓋）が η の調音点（軟口蓋）に同化される。一方、黒河方言ではこのような同化が起こっていない。

(4) 語頭における y の挿入について考察することで、i で始まる古典語の語と同源の関係にあるシベ方言の語の語頭に y が挿入されるか否かは、古典語の語に歯擦音があるかないかに関係がある可能性を指摘した。

(5) 母音の円唇性の同化について考察することで、(i) a...u は黒河方言では規則的に逆行円唇同化が起こるが、他の方言では起こらない場合もある、(ii) u と a の間の軟口蓋・口蓋垂子音が唇音化される場合があることを指摘した。

(6) si と še の対応について考察することで、si > še の有無と規則性は、方言によって、また、si の位置によって異なることを明らかにした。

(7) 母音の脱落について考察することで、屈折接辞の前における高母音の脱落の可能性と、共鳴音の前における高母音の脱落の可能性は、方言によって異なることを明らかにした。

(8) 音位転換について考察することで、音位転換は音素配列論的制約に関する場合と、品詞に関する場合があるということを明らかにした。

第5章の後半では、古典語と現代方言を対応させつつ、音素配列の違いについて、(i) 語における一般的な音素配列の制約の違い、(ii) 音節構造の制約の違い、(iii) 音節境界を跨ぐ場合の子音連続の制約の違い、という3点に分けて考察を行ったが、特に (ii) と (iii) に重点を置いて論じた。(ii) に関しては、音節末尾における共鳴音の連続の変化の考察を通じて、古典語の「半母音＋鼻音」の音節末尾は三家子方言・黒河方言・シベ方言では消失したか、または減少する傾向にあるが、古典語に見られない「半母音＋流音」の音節末尾はシベ方言に存在することを明らかにした。(iii) に関しては、音節境界を跨ぐ「阻害音＋共鳴音」は古典語にはほとんどないが、現代の三家子方言と黒河方言に観察される一方、音節境界を跨ぐ「n＋軟口蓋・口蓋垂子音」は古典語にはほとんどないが、現代のシベ方言には見られることを指摘した。

第6章は古典語と現代方言の超分節的音韻論の比較に関する考察である。第6章の前半では、現代方言における低いピッチを伴う強勢を生じさせる要因につ

いて考察した。その結果、(i) 聞こえ度の差異による強勢の移動、(ii) 低いピッチで始まる音節の次の音節の1つの子音への融合、という2つの要因を明らかにした。

第6章の後半では、古典語よりも早い段階（pre-古典語）から古典語を経て現代方言に至るまで、母音調和がどのような変遷を経たかについて考察した。この考察によって、pre-古典語の [±RTR] の母音調和は、現代方言に至るまでの過程で次第にグルーピングが崩れてきたこと、および現代の三家子方言とシベ方言には体系的な円唇性の *metaphony* が出現していることを明らかにした。また、女真語、満洲・シベ語の古典語、現代方言を比較した結果、母音調和の特性を持つ接辞は、金国の女真語から明国の女真語および満洲・シベ語の古典語を経て現代方言に至るまで、次第にその数が減る傾向にあることを明らかにした。

第7章では全体をまとめた上で、今後の課題について言及した。